
アラビアン・デイドリーム

初花水色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラビアン・デイドリーム

【Nコード】

N39740

【作者名】

初花水色

【あらすじ】

女魔神に恋しちゃった男に恋しちゃった少女・カマラの、好きな人の好きな人を探す旅の話。シーラーズが気になっているのに、彼と一緒に彼の意中の魔神を探すなんて、やってられない。そんな不毛な恋をするカマラにも、新たな恋が?! アラビアンナイトの世界をベースにした、ラブコメディ。

0・序章（前書き）

アラビアンナイトの世界は勉強中ですが、不勉強なところも多々あると思います。

それでもどうか、アラビアンで中東で砂漠な世界を、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。
明るいうラブコメを、どうぞ。

0・序章

この男を、くびり殺してやりたいと思うのよ。

「だめだ、やっぱり僕の命はたえてしまうよ」

「はいはい」

「彼女に会えない日々が続くなんて考えられない」

「うんうん」

「胸が苦しい…もう歩けない。カマラ、おぶって」

「ぶっ殺すぞ」

あたしのことを振り向いてもくれない男を想うのは不毛だ。それに、想う相手が自分以外の女性を愛していると口にするのを聞くのはもっとも悪い。

そしてこのヘタレ駄目男が旅の途中で弱音を吐くのを聞くのは日常茶飯事であつたけれど、今日こそ殴り殺そうと思つた日はないわ。

「冗談だよ、カマラ。君にそんな事はさせない」

「じゃあ黙ってて」

「だって、こつ無駄口でもたたいてないと、彼女へ会えないせつなさに押しつぶされそうになるんだ……」

よいしょ、と影を背負い出すシーラースにあたしはうんざりとした顔をしてみせる。効果があつたためしはないけれど。

「どこに居るんだ、麗しのマイムナー……」

想う相手の、愛する女性の名前なんて、聞きたくない。

あたしはシーラースを置いていくようにずんずんと早足でバザールを駆けた。人々にぶつかりながら、果物屋の籠を蹴りながら先へ進む。

くそう。こんなヤツ、放っておくんだった。

あたしは何度したか分からない後悔を、またも始めたのだった。

1・魔神のランプ

ことの始まりは、半月ほど前。

バグダッドの商人の娘に生まれたあたしは、もうおいそれとは会えなくなってしまうた友人のシーラーズの訪問によって日常をぶち壊されることになる。

「久しぶり」

女は家で、男は外で。それがここら一帯の当たり前の社交場。女は家で、友人や親類とお茶をして楽しく過ごす。男は喫茶店や市場なんかで、わいわいと騒ぐ。女のあたしにしてみれば不公平だと思うけど、仕方がない。

子供のうちはまだよかったが、もう年頃の娘になったあたしは、家の中にもっていないければならなかった。その日は、死んだ母さんの妹に料理を教わっていたところで、家から出るつもりはなかった。

道に面した家の窓の前、あたしはちょっとぼんやりとしていた。そこにふいをついて出てきたのが、シーラーズというわけ。

突然現われたシーラーズに、あたしは目を丸くした。一瞬、誰だっけコイツと思ったのは内緒だ。

窓の向こうの雇気楼のような男。

「シーラーズ？」

「そうだよ？」

何故そんなことを言うのか、というように首をかしげたシーラーズの素振りには幼い頃遊んだ時の記憶のそのままだったけれど、今はそのほとんどが過去のものとは違っていた。

身長は首をぐいと持ち上げなければ頭が見られないくらいにのびているし、顔立ちなんてもう大人の男のものだ。たしか、あたしと二つ違いの年上だったからもうすぐ十八歳というところだろう。それにしても、まるで満月のように美しい美男子に育ったものだ。

よく通った目鼻立ち、黒い瞳は理的で、ゆるくカールした髪はつややかな黒。ひきしまった肩に、すらりとした四肢。

悪ガキ時代のあたしがよくいじめた相手を、うっかり見惚れてしまつくらいに成長していた。そんな自分に気がつき我に返ると、強い口調で用件を問うた。

「な、何の用？ 気づいてないかもしれないけど、あたし、一心女なんだけど」

男が女の元に訪問するには、ちゃんと相手の家の家父にお伺いをたてなくてはならない。その上、今あたしは被り物ヒシヤップをしていないではないか！

やっと気づけたあたしは慌てて手ごろな布を探すものの、まともなものが見つからなくて、手にしたふきんを頭にやった。女は髪を家族や親類以外に見せてはいけない。これ常識！

「うん、知ってるけど、カマラだからいいかなあって」

「何がカマラだから?!」

なんかむかつく、とあたしが額にしわを寄せてもシーラーズは気にした様子はない。いつもこれだ。あたしの皮肉や悪態に、昔からシーラーズは気にならなかった。

そういうところが、時には救われ、一時は彼が好きなのではと思ったこともあったけれど、恋愛方面にうといシーラーズが相手では錯覚だったのだとあたしは思うにいたった。

そんな初恋が、再燃することはないだろう。だって彼は今もとても鈍そうなのだ。

「そんなことより、こういう話をするならやっぱりカメラかなあと
思っ、来たんだけど」

ひょいとシーラーズは真鍮の吊りランプを持ち上げる。あたしはそれをもっとよく見たくて、窓から身をのり出すように近づいた。

何の変哲もない、吊るして使うタイプのランプだ。大きさは両手から少しはみ出す程度の、まあコンパクトなサイズ。真鍮を打ち出して形作った文様がきれいではあるが、うちにもありそうな代物。

「それが、今日の話題の中心？」

どうしてそんなものを見せるのだとあたしは言った。すると、シーラーズはまるで子供みたいに笑ってみせた。

「これ、ソロモン王の封印した魔神が入っているランプなんだって」

あたしは、楽しそうなシーラーズの顔がアホ面に見えてきた。

「はあ？」

そりゃ、ソロモン王の偉大さは知っている。自分に逆らう、アッ

ラーを信じない魔神をつばや何かに封じ込めてしまいう力を持っている。でもそんなのは、日常的じゃない。伝説か、おとぎ話の一つだ。今でも信じている人はたくさんいるけれど、あたしは自分の目で見ただものしか信じない。だから、魔神の存在も信じていない。

「そういう話、カマラ好きだったでしょう」

そんな昔の話、よく覚えているものだ。あたしでさえ忘れかけていた趣味を。

昔、まだあたしが小さな子供だった頃、あたしはシンドバッドの冒険の話や空飛ぶ木馬の話が大好きで、中でも魔神の出てくる物語には心酔したものだ。

それも今は、昔のこと。母さんが死んでからというものの父さんはすっかりしよげて、あたしは自分がしっかりしなくちゃと思ったのだ。魔神と結婚するなんていう、ふざけた夢は捨てて。家を切り盛りしていかなければならなかった。

だから忘れた。忘れようとした。

「昔は、ね」

だから、思い出させないでよ。

シーラーズといると、まるで幼い頃に戻ったかのようだった。また、夢物語に胸がときめきそうになる。よくない兆候だ。

「だから、一緒に魔神さんと会ってくれないかなと思って」

魔神さん、て。あたしは心の中でだけツツコミを入れた。まったく、あんなランプに閉じ込められている相手を敬称つけて呼ぶ必要はないのに、余計なところでシーラーズの人の好きが表れている。

「その魔神とはもう会ったの？」

「まだ。カマラも会いたがると思って、封印は解かずに来た」

ああ、そうですね。

なんだかあたしはすっかりシーラーズの朗らかさやおつとりとした優しさや何かに気圧されて、というより毒気を抜かれたような気分になってしまった。

魔神なんてきつといないのに、ランプの封印を解くのに付き合ってもいい気持ちになってきた。

まったく、しょうがないなあ。

そんな感じのノリで。

「いいね。でも、ここで窓みたいで？」

「うーん…まあ、いいじゃない」

あたしたちは家の壁を隔てて会話していた。シーラーズを家に入れるわけにはいかないし、あたしが外に出るのも少しばかり問題だ。ちよつとそこまでならいいかもしれないけど。

でも、結局は魔神なんていないんだから、大げさに場所を変える必要なんてないのかもしれない。

「そうだね。じゃあ、そのランプあたしにも見せてよ」

はい、と手渡されたランプは思っていたよりは重たかった。まさか、魔神が入っているからだなんては思わななければいけぬ。少し古びた真鍮のランプ。やはり、変わったところは見られない。

「ていうか、どこで手に入れたの？」

「バザールの店で。百ディナールだったな」

「百う?! 魔神入ってなきゃぼったくりじゃないの!」

普通のランプならもつと安いはずだ。あたしは、シーラーズの人好きというか人を疑わない純真さというかに呆れてしまう。きつとずる賢い店主のたくみな話術にまんまとのせられてしまったのだろっ。

「きつと魔神さんは中にいるよ」

誰かこの三歳児みたいな男に人を疑う心を教えてやって。思わず叫びたくなった。本当に十八なのかこの男。

とにかく、あたしは彼にランプを返した。彼のランプだ。シーラーズが封印を解くのが正しいと思ったのだ。

「じゃあ、封印を解くよ」

ランプの火をともし場所に鉛で封印がしてあった。ソロモン王の名前が刻まれた封印だ。それを取ると、きつと魔神が出てくるとシーラーズは思っている。

シーラーズがとても真剣な顔をしたので、あたしはつられて顔を引き締める。どきどきしてきた。彼は、人に感情を伝染させる時があるから、信じてないはずのあたしまで、魔神が出てくるんじゃないかって期待してしまう。

でも、そんなことはない。そんなことにはならない。

それなのに、ごくりと喉が鳴ったのが分かった。

シーラーズが、その魅力的な瞳をいたずらっ子のように細めてあ

たしを一瞥した。

「早く、開けなよ」

それが何だか気に食わなくて、きつい口調で言ってしまう。それ
でなくとも、早く封印を解いてしまえと思っていたのだから。

シーラーズはおごそかに頷くと、一気に鉛の封印を取り出した。

「!!!」

むわっと、煙が一面にたちこめた。濃い煙で、どこか麝香じやうかうのよう
な匂いまでする。

首をすくめ、視界をさえぎる煙にあたしは目をつぶってしまった。

そんな、まさか。

「ああ〜、もう、疲れたあ〜!!」

絹のように滑らかな声。それはシーラーズのものでもなく、あた
しのもでもない。でも、とてもきれいなソプラノ。
煙が晴れない。

一体、今の声は何なの?!

「…魔神、さん…?」

外に居るシーラーズの方が早く煙が晴れたようだ。外気に混じっ
て消えた煙の中に、現れたのは本当に魔神なのだろうか。

あたしが、少しむせながら晴れてきた煙の向こうに見たものは、

目を奪われる光景だった。

「やっと出られた！ アツラーに栄光あれ！」

そこには、絶世の美女が立っていた。

2・女魔神

「よかったわ、わたし、もう二度と日の光を拝めないかと思っ
たところだったのよ」

その美しさ、まるで人間ではないかのよう。

乳白色の肌の色、巻き毛は黄金、瞳はまるで海のように青く澄ん
でいる。唇はアネモネの花のよう。

同性のあたしでも目が離せないくらいに、美しい。

シーラーズなんかは、ぼかんと口を開けたままで何も言えないで
いる。

だからあたしが、問いかけることにした。

「まさか、本当にあなた魔神か何かなの？」

「そうよ、アダムアダムの娘」

人間の娘、という彼女の物言いにあたしはぴんときた。魔神の出
てくる物語では、あたしたちのことを「人間」とわざわざ呼ぶよう
な存在は人間ではなく、魔神なのだを教えてくれている。
ぴんときても、頭の方はなかなかついてこれなかったけれど。

「まさかまさか、本当に…？」

「しつこいわね、アダムアダムの娘。わたしはマイムナー。アツラーの教
えを信じる良き魔神よ」

マイムナーは腰に両手をあてて、ちょっと不機嫌そうにしてみせ

る。

その姿すら様になって見えるのは、どうしてだろう。美形の成せる技？

ともかく、やっとあたしの頭は働いてきた。

きっと彼女が本当に魔神なのだとして、それもなんとあたしたちの神をちゃんと信じているという善玉系の魔神らしいのだ。

物語の中の魔神にも、人間と同じように悪い魔神と良い魔神がいる。

さつきからしきりに感謝をアツラーにしているから、この女魔神はアツラーを信じているのだろう。

「ヤーアツラーわおすこい…。こんなことがあるなんて」

「わたしも、びっくりしたわ。でもありがとう。悪い人間に捕まっ
てしまったね、ランプなんか閉じ込められてしまったの」

そういえば、シーラーズはあの地面に転がっている真鍮のランプにはソロモン王が悪い魔神を封印したと言っていたが、嘘だったの
だろうか。彼に売りつけた、店主の嘘。

そのことについてあたしがマймナーに話すと、彼女はやはりい
ささか憤慨した様子で答えた。

「そんなの、嘘に決まっているでしょ。その人間はわたしが魔神の
王の娘と知らずにそんなことを言ったのだわ。失礼しちゃう」

「そつだよ…：あなたののような美しい方が、悪い魔神であるはずがな
い」

ここでやっと、あたしも忘れていた存在のシーラーズを思い出す。

彼を見ると、やはり、というか何というか。美人の女魔神、マイムナーから目を離せないでいる。まるで、そう、まるで 恋に落ちた男のように。

幼い頃からシーラーズを知っているけど、あんなほづけた表情は見たことない。アホ面とか、マヌケ面ならたくさん見たのに、あんな風に人を見る彼を知らなかった。

魂を抜かれたみたいにな、ただその黒い瞳をマイムナーに注ぐ。

ああ、これは間違いなく。

「あら。ごめんなさい、あなたが居たのに気がつかなくて」

さらりとひどいことを言っている気がするマイムナー。しかし彼女がほほ笑むと、シーラーズははっとしたように目を見開いた。

「僕はシーラーズ。あなたは…」

しかし、シーラーズはそれ以上を告げられなかった。絶世の美女魔神が彼の言葉を待って、見つめてくるものだから、恋する男は舞い上がってしまったのだ。

何なのこれは。目もあてられない。ていうか、見ているこっちが恥ずかしい。

あたしは自分の額に手をやった。

今までに とはいってもここ数年はシーラーズに会わずにきたが 彼が恋をした話を聞いたことがあっただろうか。

あたしの覚えている限りでは、ない。

よもやとは思うが、初恋じゃああるまいな。

何にせよ、一目惚れというのは間違いない。

あたしは、一目惚れなんていうもので恋に落ちる理由が分からない。

そりゃ、見目麗しい方が相手のことが気になりやすいだろうが、大事なのは中身だ。

優しくて人柄がよくなってはだめ。

それに、女はどうせ家父の言う通りの男性と結婚するのが常だ。

女に、選択肢なんてない。一目惚れしたって無駄なのだ。父親に決められた結婚相手を好きになるしかない。

だからだろうか、そんな風に簡単に一目で恋に落ちる若者がシーラーズが、うらめしく思えた。

「そっちのアダムの娘。このシーラーズって男は、何だって黙ったままなの？」

心底ふしぎそうなマイムナー。そんな美貌をほこっておいて、これまで彼女に一目惚れをした男を見てこなかったのだろうか。正しくは、一目惚れした男の魔神を、だろうけど。

「あ、あたしはカマラです。それから、えっと、シーラーズのことには気にしないでください。いつものことなので」

いつもの彼ではないのは分かっていたが、あんなシーラーズが口を開くの待っていたら日が暮れてしまう。

これから、どうしよう？

「ごうしてあなたたちに助けてもらったのも、アツラーの思し召しね。是非お礼をさせてほしいわ」

マイムナーは一目惚れ青年を気にしないことにしたようだ。

すっかりあたしの方に向き直って、にっこりとほほ笑む。
本当に、どきまぎするような美しさ。思わず目を逸らしてしまう。

「お礼だなんて。それに、あのランプの封印を解いたのはシーラーズです」

「そうなの。あなた、本当にありがとう」

放っておくことにしたはずが、さすがに命の恩人を捨て置くことは出来ないらしい。マイムナーは胸に手をあて感謝を口にする。

ずっとぼんやりしていたシーラーズだが、やっと正気に返ったような顔になる。

「いいえ、こちらも、まさかあなたのような罪もない魔神が閉じ込められていると考えてなかったの……本当によかった」

そう言う彼は、とても真摯で、普段は明るいけれどあんなに真っ直ぐな瞳をするシーラーズじゃなかったはず。

彼は今、もし自分がランプを買っていなかったら、マイムナーがどんな目にあっていたか分からないということに気づいて、神に感謝し、この幸運の感動に胸を打たれているのかもしれない。

「まあ、あなたがよかったなんて言うのはおかしな話だわ。でもありがとうがとう。それより、わたしはやっぱり、あなたたち二人にお礼をしたいと思うのよ」

ちら、とマイムナーはあたしの方を向いた。

なんて気が良い人！ いえ、気が良い魔神！

あたしなんて、この場に居合わせただけのようなもので、本当に何もしていないのに。

それどころか魔神の存在を疑ったりもした。
今も少し、信じられないけれど。
そんなことを言ったらマイムナーは気を悪くするだろう。

「でも、もしよろしければあなたが魔神だという証拠をお見せ願えませんか」

なんと、あのシーラーズがあたしの思いを代弁するように口を開いたではないか！

どうということなの？

シーラーズはあの生来の純真さでもって、十八にもなって魔神の存在を信じてランプを買ったのに。こうしてマイムナーが何も無いところから現れたというのに。

「ちょっと、シーラーズ？ 失礼よ」

疑うなんて。そりゃ、あたしもちょっとは気になっていた。突然現われただけの、とっても美人な女の人なのかもしれないし、なんて。

まだ魔神らしいところは見せてもらっていないけど、そんなストリートに言っではいけないと思うの。

「それもそうね。いいわ、何をしてみせましょうか」

しかしマイムナーはあっさりと魔神の証明をしてみせると言った。あれ、いいの？ それならあたしも聞けばよかった。

「じゃあ、あたし、お酒が飲みたい！」
アラキ

アラキはナツメヤシから作ったお酒で、あたしたちの間では飲む

ことを禁じられている飲み物。ゆえに、どこにでもあるものではない。まして飲むのを禁じられているお酒を、普通の人間　それも女性が簡単に持ってこれるはずがない。

そう思ってたことだったけど、確かにあたしの中には一度でいいからアラキを飲んでみたいという思いもあった。

禁じられたことをする。

誰もが一度は、駄目だとわかっていながらやってみたくなるものではないだろうか。

一説には、お酒は舌に甘く、とろとろと喉を滑らかに通り、世界がみんな美しく見えるようになるという。

ひどく甘美な香り。そして、夢のような味。

あたしは、一種の憧れに近いものをアラキに抱いていた。

「駄目だよ、カマラ。お酒なんて」

たしなめるようにシーラーズが眉をよせてあたしを見た。まるで父親みたいに、厳しい目をしている。まったく堅物なんだから。

でも、飲まないまでもマイムナーがすぐさまお酒を用意したら、それは彼女が魔神であることの証明になる。

「いいわ、少し待ってて」

シーラーズの制止も聞かず、その女魔神は一瞬で姿を消してしまった。

これこそ、魔神の証！

目を丸くしてあたしたちはマイムナーが居たはずの場所を凝視した。

「今の見た？」

「見た。ていうか、見えなくなった」

あたしたちは目をしばたきながら、どうしたものかと顔を見合わせる。

シーラーズに、恋に浮かれた呆け面はない。今はもう、消えた彼女が心配でならないというような、どこか困った表情をしている。いえ、これこそ恋に浮かれた男の顔なのかもしれないけどね。

そんな表情を引き締めて、わずか怒ったような瞳をシーラーズはあたしに向けてきた。

「カマラ、どうしてお酒なんて。他のものでも良かったじゃないか」

「だって。急に思いついたんだもん」

それは嘘じゃなかった。いざ、魔神に用意してもらって、こんなものは魔神じゃないとすぐに取り出せない！ なんてもの、他に思いつかなかった。

金銀財宝なんて、あつたらいいとは思うけど、どこかの宝物庫から持ち出すなら、犯罪だ。

お酒にしてみてもそうだろうけど、お酒ならまだ、少しなくなっただくらいで人は困らないはず。

…でも、やっぱり人のものなら、犯罪かな。

あたしの思いが、シーラーズに伝わったのではないだろうが、うつむいたあたしに彼は気がついた。

「カマラ」

「おまたせ！ 持ってきたわよ、ご所望の品を」

あっという間ではなかったものの、マイムナーは戻ってきた。

その手に、つぼと杯を携えて。

唇で弧を描いた彼女の顔は、やはり美しくて あっけにとられ

ながらも、また見惚れた。

3・魔神の証明

香るは、たしかにナツメヤシに似たそれ。でも、どこか鼻につく、嗅いだことのないふしぎな香り。

アラキ
お酒を欲するようになり、あたしの口の中に唾液がたまってきた。

アラキ。

念願の、というほどではないが、気になっていた「酒」という飲み物が、今ここにあるのか。

女魔神がつぼを振ると、たふんと確かに中に液体が入っていると分かる。

「さ、どう？　まだわたしを魔神じゃないって疑う？　その前に、飲む？」

彼女もアツラーを信じる魔神なら、飲酒は禁じられているのではないだろうか。

それとも、人間にとってのお酒と魔神にとってのお酒は違うもので出来ているのか。

あたしの手がアラキのつぼに伸びた時、シーラーズが手首を掴んできた。

「何」

「駄目だって、カマラ」

「……一口よ、一口」

「駄目だ」

頑なに駄目押しをするシーラーズに、あたしはだんだんと腹がたってきた。

何よ、自分はさっきまでぼけつと美魔神にうつつをぬかしていたくせに。

あたしだって、何かに身をこがしてみたい。別にお酒^{アラキ}じゃなくてもいいんだけど、今はここにお酒があるんだから、飲んでみたっていいじゃない。

それに、禁止されているからやっぱり、少しだけでいい。少しならそんなに悪いことじゃないはずだ。

「カメラ」

掴まれた手首が痛いくらいに握られる。

シーラーズの漆黒の瞳が、自分を律するように訴えている。ひどく、真摯な瞳。

どろろっというのよ。

直視できなくて、あたしはうつむいた。

あんなシーラーズは、見たことがない。

「ごめんなさい、わたし、いさかいの種を作るつもりはなかったのよ」

ぱつと顔を上げると、マイムナーは整った柳眉を寄せて、申し訳なさそうにほほ笑んだ。

その手に、アラキのつぼも、杯もなかった。消してしまったのだろうか。

「いえ、こちらこそすいません、あなたにわざわざ用意してもらったのに」

シーラーズが対応する。

何よ、あたしはマィムナーに感謝して、いただくつもりだったのに。

「でも、わたしが魔神だというのはよく分かったでしょう？ まだ何か用意しろっていうなら、するけど」

「いいえ、あなたが一瞬のうちに姿を消すのをこの目で見ました」

一拍、シーラーズは言葉をつまらせるように口を閉じた。ため息でもつくかと思うような様子で、続ける。

「あなたは確かに魔神のようです」

女魔神は、今度こそにつこりと嬉しそうにほほ笑んだ。

「よかった。信じてもらえないことほど、悲しいことはないもの」

「そうですね…」

半分以上、シーラーズとマィムナーの二人の世界が出来上がっているように見えた。

シーラーズは残念なところがいろいろあるけれど、見た目はそう、悪くない。むしろ、マィムナーほどの美女にはかなわないかもしれないが、美男子だ。

お似合いな、二人。
なのかもしれない。

途端、胸の中がざわついた。
どこか不安のようなものが居付く。

何、これ？

あたしはそれをなかったことにしようと、首を振る。

「そうだ、マイムナーはどうしてランプに入るはめになったの？
魔神の世界ってどんなところ？ いろいろ話を聞きたいな」

無理矢理に、話題を作って。

二人だけの世界をぶち壊す。ちょっとシーラーズには申し訳なかつたけど、こうでもしなきゃ、あたしは彼らに黙って家の中にもこもってしまっただろう。

「ええ、もちろん！ わたしも、久しぶりにランプの外に出られて、誰かと話をしたかったところなの！」

豪華な巻き毛を翻して、マイムナーは楽しそうにに応じてくれた。
それはどこでしょうかと、あたしが思案していた時だ。

「カマラ？ 誰か居るの？」

母さんの妹 叔母の声だ。
しまった。

こんなところ、叔母に見られるわけにはいかない。
会っているのが、一人は男、もう一人は人間でなく魔神だなんて、

何て言い訳したらいいのか。

「は、はい！ 今行く！」

呼ばれてもいないのに、返事をする。

急ぎ二人の人物に視線をやった。

「シーラーズ、あたしもう家に戻るから」

もう家の中には居るのだけ。

「えっと、マイムナーはシーラーズについて行く？ それなら今度、会いに行くから話聞かせてね」

人の気配が近づいていたので、あたしは慌てて窓を閉めた。
明り取りの窓が閉められたことよって、室内が薄暗くなる。

「カマラ、誰かと話をしていたのなら、別にいいのよ。相手が殿方でなければ」

「いいえ叔母さん、あたしは一人でしゃべっていたの」

「そう？ 変な子ね」

一人言はたしかに怪しいだろう。でも言い訳という嘘なのだから仕方がない。

なんとかシーラーズの存在も隠し通せたようだし、魔神も見えなくなっただけだ。

ほっと肩をおろすと、部屋の奥へ引き返した叔母の背後に、マイ

ムナーが居るではないか！

「まー！」

しつとマイムナーは唇に人差し指を寄せた。

黙っているということらしい。でも何でここに！？

「カマラ？」

「いいえ叔母さん、何でもない！」

「そう。早く台所において」

叔母は料理をあたしに教えていたのだけど、下準備が済んで少し休むといって、休憩をはさんでいた。彼女が午睡をとっていた間、あたしはああして窓のところまでシーラーズに再会して、ランプの中から出てきた魔神と邂逅したわけだ。

短い間に、何てたくさんのことがあったのだろう。

そして、それを裏付けるかのように女魔神は今もそこに立っている。

正確には、空中に立っている。浮遊しているといってもさしつかえはない。

「マイムナー？ シーラーズのところに行ったんじゃないの？」

声を抑えて、あたしは問う。嫌なわけではないが、少し困る。魔神の存在を叔母が認めるかどうか。卒倒するかもしれない。

「女は女同士で話しましょ」

「いや、でも……誰かに見られたら……」

こんな言い方はしたくなかった。まるで彼女のことを迷惑だと言っているようなものだったから。

あたしは自分の言葉にはずかしくなってしまう。

「大丈夫。わたしは、そうと意識すれば人には見られないようになるから」

「でも今、あたしは見えているわ」

「カマラは特別。カマラ以外の人には見えないはずよ」

そんな便利なことが、魔神には出来るのか。

あたしは驚いたとともに、うらやましくなった。

あたしにも、そんな力があつたらいいのに。

バザールにも一人で、気がねなしにいつでも出かけられる。

それから、旅にだつて出かけられる。

人の目を気にしないで歩ける。

女は窮屈だから。

「それはそうと、今忙しい？ それならわたしはあんたのことを見ながら待っているわ」

見られると思うと気恥ずかしいのだが、確かに今は、叔母の元に向かつて一緒に料理を作らなければならぬ。

マイムナーにはしばらく大人しくしてもらえると、非常に助かる。

「ごめんなさい、そうしてもらえるかな…」

「ええ。わたし、人の営みを見るのは好きよ。でも、寝る前にでも少しお話ししようね」

最後に、これだけは聞いておきたかった。

「シーラーズには何て言ってきたの？」

窓を閉めた後のことは何も知らない。

恋する男は、さぞかし残念がっただろう。

「またカマラと会いに行くわ、って」

あっさりしたものだっただ。

そっか、ごめんねシーラーズ。

もし許可が出れば、明日にでも会いに行くから。

あなたの愛しいマイムナーを連れて。

どうしてか、ふう、と息がもれた。

何でだかは分からない。

分からなくていいと思ったから、あたしは魔神やらシーラーズやらを意識からしめ出して、叔母との料理に専念することにした。

少しだけ、お酒が飲めなかったのは、残念だと思った。

あれが一生のうちお酒を飲む最後のチャンスだったかもしれないのに。

4・女の子たちの夜

叔母とは豆料理や羊肉を使った複雑な料理を作った。

正直、あたしには調理は向いていないのかもしれない。

叔母の言う通りに作っているはずが、なんだか別のものになってしまうのだ。

あたしが気の遠くなった瞳でぼんやりしていると、叔母には見えないようにしているマイムナーと目が合った。楽しそうで、何故かあたしは余計に気が重くなった。

料理は、誰かにしてもらえたらいいのに。

男はそれでいいけど、女はそうはいかない。

うちも、そこまで貧しくはないので、召し使いが二人居るが、さすがに女が一切料理をしないというのは有り得ないことだ。

だからもっと料理修業にはげまなければならぬだろうけど、夕方帰ってきた父さんに食べさせたあたしの料理の感想が、「美味いぞ」という棒読みでさえなければ、もっとがんばろうという気持ちになれたはずだ。

まったく、やってられない。

あたしの手は、きつともっと違うことに向いているのだ。

料理以外の何かに。

「はあ……」

「ため息ね」

夜になれば、眠りにつく。

ランプの油がもつたないから、普段はすぐに眠りにつくのだけど、あたしは今こうやって、自分の寝室でランプの火を消さずに寝台に座っていた。

今日はお客さんがいるからだ。

言わずもがな、女魔神のマイムナーさんだ。

「気にしないで。そういえば、マイムナーの入ったランプは一体どうしたの？」

「あれは、シーラーズが持っていったわ。持つ人間が魔術師ではない限り、またあのランプに閉じ込められる心配はないし、それでいいと思ったから」

ふうん、とあたしは眉を上げる。

さてと。何だか気まずいぞ。

気まずく感じているのは、あたし一人かもしれないけど、何せ相手は絶世の美魔神。

男女ともなく十人の人間が居たら、十人が振り向く美貌。魔神が十人居ても、同じこと。少し、気圧される。

そしてマイムナーはあたしが一時期憧れていた金髪だ。うっとり眺めたいけど、その美麗な瞳を向けられるとどうしてか顔を背けたくなる。

あたしの髪は赤みがかった茶色。いつか、髪が傷んでいるみたいだと言われた奇妙な色合い。ひそかなコンプレックスだったりする。それに巻き毛ではなく、あまりにもくせっ毛でまとめるのに一苦労だ。髪に塗る油をたやすと、爆発したようになってしまっから、うちでは髪の油はかせないものとなっている。

マイムナーの巻き毛は、そんな爆発とは無縁のつややかな髪をしている。滑らかで、やわらかそう。きつと触れたらごわごわなんてしないんだらうな。

「どづしたの？」

「ううん。それより、魔神の国について聞かせて」

聞きたいことではあった。

自分の故郷のことを尋ねられて、嫌がるものも少ないだろう、マイムナーも快く話してくれた。

曰く、そう人間の世界と変わらない世界であるが、海に住む魔神たちはとりわけ人間とは異なっているということや、魔神の世界でも何でもかんでも魔術や魔神特有のふしぎが通用するわけではないということ。アッラーを信じる魔神ゆえに、つつましく穏やかに生きているものばかりということや、悪い魔神とはいつも対立していることなどが聞けた。

マイムナーの語る世界には、想像を広げられるけれど、やはりどうしても想像力には限界がある。

「一度行ってみたいな…」

かつては憧れた魔神と、その魔神の住む世界。

あたしがそう口にするのは無理もないことだった。

「じゃあ来る？」

「え！ そ、そりゃ…行けるものなら行きたいけど、でも…」

「故郷に未練があるんでしょ、それなら無理は言わないわ」

とつても大人な対応だ。マイムナーは見たところ、二十代くらいの女性だけれど、魔神だからあたしなんかよりもっと年上なのかもしれない。

シーラーズなんかは、魔神の国に行きたがるのかな。なんて思えば、あたしの胸には異物感が広がる。いや、こんなことを考えるのはよそう。

「そうそう、どうしてランプに閉じ込められちゃったの？」

こちらも聞いてみたかった。

話の端々から推測するには、悪い魔術師に捕まったとか、そういう話だった気がするけど、どうなんだろう。

「ああ、もう、嫌なやつがいたのよ。どれくらい前になるのかしらね、あれは」

マイムナーは普段、魔神の国と人間の国を行き来するのに、古い井戸を使っているそうだ。

そこを使用する者はごくわずか、たまに人間の様子を見に行くのによく使った。

その日も、井戸から飛び出すと、人の大勢居るバザールかどこかへ行くつもりだった。

普段誰もいない井戸の近くに、一人の魔術師が居た。

老いた魔術師で、ぎらぎらとした瞳だけが、若い力にみなぎっていたそう。それが、身なりはあまりよくなくて、マイムナーは訝しく思ったので彼を気にしないでその場を後にした。

それなのに、移動した先で妙な視線を感じる。
嫌な視線だった。

その日、マイムナーは人に姿を見えるようにしていたから、バザールに溶けこんで大勢の人間の一人だと見えるようにしていた。
でも、またあの魔術師が現われた。

『魔神と人間、どっちかね？』

老いた魔術師は言った。

一瞬、問われたことの意味が分からなかったが、マイムナーは答えた。

『わたしは人間よ、おじいさん』

嘘だったが、彼には魔神と言っただけで何か悪いことに利用されるような気がしたのだ。

『残念だ、娘つこの魔神よ。お前が嘘をつかなければ、わしの家来にしてやったのに』

そう言うつと魔術師はランプをマイムナーに向けた。

「気がつくつと、わたしは真つ暗闇の中にいたつてわけ」

そこがランプの中だったのだろう。

「何だかふしぎな魔術師ね」

もつと、極悪な魔術師を想像していたのだけど、思っていたよりは穏便なのかもしれない。

問答無用でマイムナーをランプに閉じ込めたのだから、そうではないのだろうか。

「それから何年たったのか……シーラーズの手によって封印を解かれるまで」

あれ？ でも、その魔術師の手によって捕らえられたのなら、あのランプのソロモン王の名前が刻まれていたのだろう。

あれがなければ、ただの魔術師の手による封印となる。

でも、マイムナーを封じ込めたのはソロモン王なんかではないはずだ。

どういふことだろう。

「明日は、シーラーズのところに行きましょう」

マイムナーの言葉はあたしの思考をさえぎった。

簡単に言ってくれるが、女が外で男に会うのも、家の中で会うのもそう簡単ではない。

手はないわけではないけど、どうしたものか。

いつそ、マイムナー一人でシーラーズに会いに行けばいいと思っただが、それを口にする気分にはなれなかった。

「でも、簡単じゃないよ」

結局、最初に思ったことだけを言葉にしてみる。

「まあ、魔神の手を借りれば難しいことなんてほとんどないわ」

そうは言っても、あたしはあんまりマイムナーの手を借りたくないんだけどな。

彼女が嫌なのではなく、一度便利なことを味わうと、マイムナーがいなくなつた時にその便利さをないものねだりするの嫌なのだ。

本当は、魔神の使う、魔術なんて味わってみたいに決まっている。でもどうしてか、マイムナーに本心を言えなかった。

「ちょっと面倒になるけど、出かけるのにはいい手があるの」

まだ年頃になったばかりの頃、子供のようにあちこち出歩くのを禁じられはじめた。

遊びたい盛りのあたしは、それを嫌がって何とか親にばれずに家を出る方法はないものかと思案した。

最近使っていないなかった方法だ。

言いながら、あたしはちょっと、笑顔作りに失敗したような気がしていた。

5・バザールへお出かけ

あたしの家には、母親がいない。父さんは、死んだ母さんをとても愛していたから、後妻をめぐめることはなかった。

あたしのような子供でも、女は家庭を守るといふ仕事がある。することは、ないわけではないが、とても大切な仕事などない。

だから、ともに家を守る女親がいないから、父さんが出かけてしまえば家を抜け出すのは、そう難しいことではないのだった。

「来たよ」

あんぐりと、シーラーズは実にマヌケな顔を見せてくれた。

最初はあたしだと、気づいていなかったみたいなのに、あたしの背後に浮遊するマイムナーの存在でやっとあたしだと気がつけたよ。うだ。

「な、ま、カマラ?!」

うるたえるシーラーズも、少し珍しいものだ。平素からおっとり穏やかでちょっとマヌケなシーラーズは、やたらに感情の起伏に富んでいるとはいえない。そんなものだから、狼狽することも少ないのだ。

面白い顔が見られたから、あたしはふっとほほ笑んだ。

「今は旅人ハサンでもいいよ」

無難な男の名前を口にする、あたしは今、男装をしていた。

男ものの服に、ターバン。どれも父さんの服を借りたから少しづつかぶかだけど、こうしてゆったりしたズボンを履けばたいいのも

のは男に見えるかもしれない。

外出を気軽に出来る方法が、これだった。

以前は男装して、よく遊びに行ったものだけど、シーラーズの前ではしたことがなかったっけ？

シーラーズの家に行つて、男の格好だからすぐにシーラーズを呼び出しても応じてもらえた。

彼の家に来るのは久しぶりだ。そう何度も来たわけじゃないし、家の奥までは入れてもらったことはないが。

「えっと…もう、驚いて何も言えないよ。どうしよう、とりあえず、中に……いや、まずいか」

未婚の男女が婚約者でもないのにどちらかの家に入るのはあまり体裁がよろしくない。どうせシーラーズのことだから、このことが人に知れたらあたしの名前に傷がつくとも思っているだろう。男装しているから、女だとばれなければいいのに。

「はいはいお邪魔しますよ」

無理矢理にシーラーズの家へ入ると、マイムナーもついてきた。

そのためだろうか、シーラーズは二の句が告げられなくて、家の奥へと先導してくれた。

ただし、行き着いた先は中庭だ。四角に切り取られた青空の広がる下に。

家の中だけど「外」というシチュエーションが彼の気に入ったのかもしれない。堅物なシーラーズの。

「カマラ」

呆れたようだが、怒気に近いものがその声には含まれている。
あれ。

ちよつと、まずかったかな。相手は本気のような。

「こんなことしなくても、他には何かあったらう」

「ないない」

軽く流すことにして、あたしはシーラーズの怒りをゆるめられないものかと手を振った。

天然でとんちきなところがある癖に、妙に頭が固いんだから。

中庭には、水のはられた水盤がある。狭い中庭だ、それを囲むようにしてあたしたちは立っていた。

「困ったわね、あなたたちはお酒アラキがなくともケンカしてしまうわけ」

ここでやつと、シーラーズは恋する相手がそこに居るのを思い出したようだ。

わずか恥じ入るように顎を引いて、もごもごと口を動かす。

「すみません、何だかみつともないところを見せてしまい…」

そうね、特にあたしなんかね。男装だしね、はしたないね。軽い気持ちではあるが、心の中で皮肉ってやる。

うーん、もうこの二人、二人つきりにした方がいいのかな。

あたしは男装なんていうマヌケなことまでして家を出たわけだけ
じ。

何もこんなことまでする必要はなかったのだ。

今更になつて後悔する。夜中に考えたことを、朝に実行するとおかしなことになる時がある。夜書いて満足したラブレターが朝になつてとてつもなく恥ずかしいもので破り捨てたくなるのと、一緒だ。

やってしまったかな。

でもいいや。

ここであたしはシーラーズの家を出て、バザールにでも出かけよう。

久しぶりに気がねなく買い物が出るだろう。

どうのこうのと二人が話しているから、いつ口をはさめばいいかとぼんやりしてしまう。

マイムナーは魔神だけど、女のはずが、いいのかな。

恋する相手だから、何でもいいのかな。

あたしはどうして、料理が出来ないんだろうな。

空はどうして、青いんだろうな。

あまりにとりとめのない思想ばかりが飛び出して、あたしの意識は地上から遠ざかっていた。

「カメラ！」

突然の声に、あたしは身を縮めていた。びっくりした。

「何？」

「どうせだから外に行こうって、シーラーズが」

見上げれば　　そう、見上げないといけない場所に彼女は浮かん

でいた　マイムナーがお誘いの言葉を口にしてこちらを見ている。
シーラーズが言ったのか、と彼を見ると、どこか拗ねたような瞳
があつて、すぐに逸らされた。

何なの？

でも、バザールに行けるなら大歓迎だ。

「行く。どうせなら、カフェエハーネ喫茶店にも」

言った途端、シーラーズが珍しく嫌そうな顔をした。

バザールに来るのは久しぶりで、こんなものだったかと少し胸が
躍る。

布地屋、香料を売る店、金糸の刺繍が入った服が売られている服
屋。

果物や、小麦を売る店に、香辛料のかおりたつ店。

今日もバザールは人と物で溢れかえっていた。

午後に近い通りは熱気に満ちている。

「喫茶店は、駄目だ」
カフェエハーネ

「何でぞ」

「……あまり良くない場所だから」

「何が」

「なんでも」

さつきから、ずっとこのやりとりをしている。
そろそろ疲れてきた。

カフェエハーネ
喫茶店は男社会の中でも、更に男の世界だ。

水タバコを吸って、コーヒー片手に男たちは語り合う。時には楽しく、時に深刻に。

別に、そんな世界に憧れを抱いているわけではないが、興味はある。

普段あまり飲ませてもらえないコーヒーと、水タバコを吸ってみたい。

水タバコは、女なら家で吸うものだが、母さんが水タバコを吸わない人だったので、うちにはない。父さんは家では吸わずに外で吸っているらしい。

どうしても、と譲れないほどの思いはないが、シーラーズが頑なに拒否をするものだから、かえって気になって仕方がない。

シーラーズが隠したい何かカフェエハーネが、喫茶店にはあるのでは？ と思うと愉快でならない。

それを探り当てて、からかって遊ぶのも楽しそうだ。
悪ガキ時代のあたしがよみがえってくる。

「マイムナー、シーラーズがよく行く喫茶店カフェエハーネってどんなところだと思
う？」

「さあねえ。でも、若い人に人気の店なんて少ないものよ」

曰く、若輩者が入りにくい喫茶店カフェエハーネは多いのだそうだ。なんとなく、
そういう雰囲気があつて、若者はすくすくとお決まりの店に行くの
だとか。

「とにかく、駄目だから。バザールで何か買ってあげるから喫茶店カフェエハーネ
は勘弁して」

「そう言われると、探し出さなくなるなあ」

にまにまと、あたしは笑っていたらう。
ぱつと飛び出すと、人混みの中に紛れ込んだ。
しばらく、シーラーズを撒きたい。
あたしにも、自由時間をおくれ。

かくてあたしの願いは、叶ったりする。

6・カフェエハーネ1

シーラーズ御用達の喫茶店カフェエハーネを探すというよりは、バザールや普段行かないところにある礼拝堂モスクに足を運んで、久しぶりに一人での外出を楽しんだ。

「ぼうず、買ってかねえかい」

「お金なくってね」

男の子扱いにも、簡単にあしらえるようになった。それにしても、男ってなんて身が軽いんだろう！

心なしか空の色も明るくきれいなものに見えてきた。いつもと代わりのないはずの青い色なのに。

バザールの大通りを外れても、いろいろな店がある。

こんがり焼けた鶏肉のおいがすると、お腹がすいてきた。

今日も暑いから、シャーベットもいいかもしれない。

まだシーラーズに見つかっていないから、あたしは自由を思う存分満喫していた。

買えもしない絨毯の店でじろじろとひやかしてみたり。

あまり食べる気はないのに、果物屋ではイチジクやザクロの品定めをした。

パン屋の前に居たネコを撫で回してみたり。

またバザールの通りに戻ろうとした時、ふと目に入ったのは一軒のカフェエハーネの喫茶店だ。

建物の角にある狭そうな入り口の店で、一見したら見逃してしま
いそうな場所。ちょうど、そこへ入って行く人と出る人がお見合い
してしまい、道を譲り合っていたから見つけることが出来た。

ちよつと、覗いてみよう。

シーラーズの行き着けとかそういうのはほとんどどうでもよくな
っていた。

はじめての喫茶店だ、カフェエハーネ好奇心がわかないわけがない。

ドキドキしてきた。

平静を装って、いつも来ている顔を精一杯作ると入り口にさつと
足を伸ばした。

入り口より狭くはない。むしろ、この入り口の狭さからは考えら
れないくらいの広さだ。

少し薄暗い店内に、雑然と机や椅子が並べられている。いえ、こ
の場合は散らかしてあると言った方が正しいのかもしれない。

それから、その椅子や何かに男たちがふんぞり返って談笑してい
た。

あたしが店内に入ると、ちらちらと視線がもらえたが、何か用？
という視線を送ればそれらは引っ込んだ。

もちろんコーヒーやシャーベットを飲む者や、お菓子をつまんで
いる者もいた。それから水タバコを回し喫む者たち。

水タバコ！

あの水の透けるガラスがとっても魅力的に見える。

あまりに貧乏、というほどでもないが懷事情の寂しい男たちは、
ああやって何人が集まって回し喫みをするのが常だそうだ。

あたしも、入れてもらえないかな？！

でも、新しい環境に慣れるのに時間がかかるように、お互いに知らない間柄で水タバコの回し喫みが出来るだろうか。
二つの水タバコが回し喫みの対象になっているが、それを囲う男たちは年齢層も若くはない。

……余計に、入りづらい。

うつん、ひとまず、コーヒーをいただこうかな。

カウンターの奥に店主が居るから、そこへ向かう。
顔なじみでないから、なんとなく伺うような視線が飛んでくる。
あたしは笑って友好的に対応。

「コーヒー、一杯」

注文の仕方はこんな感じでいいのだろうか。
店主の反応を待つが、無言だ。うつん、気まずい。

「おう坊主、見ない顔だな」

「そりゃそうですよ、ここの店にははじめて足を運びましたから」

おヒゲの立派なおじさんに話しかけられた。気さくそうではあるが値踏みするような瞳。
普段は他所の喫茶店カフェハーネに行っているんだというアピールをしてみる。
なめられたら嫌だから。

「ふむ、おれはこのコーヒーが一番だと思うな」

「そうですか」

あたしなんてコーヒ―は子供の時以来だけど、黙っておく。
軽くとりすましていると、コーヒ―があたしの手元にさし出され
る。いい香りがする。

おじさんは無視をして、随分と久方ぶりのコーヒ―をいただくこ
とにする。

心の中で「いただきますビスミッラー」と唱えると、お茶を飲むのと代わりの
ない素振りでカップをあおる。

久しぶりの味。そのせいか苦く感じられましたが、相変わらず美
味しい。

「坊主、食つか」

おヒゲのおじさんが、お菓子を勧めてくる。アーモンド入りのも
ので、あたしの好きなアーモンドとくればもらわない理由はない。
お礼を言つと、一つ手に取る。

「最近不景気だな」

「まあ、そうですね」

父さんから商売の話をし少しは聞いているが、あまり仕事を家庭に
持ち込まない父さんのこと、あたしは経済の話にはあまりつき合え
ないはずだ。

今年に入ってから王の新しい法律のせいで、税金が増えたとい
うのが景気に影響を与えているのだらう。

「いい話があるんだとよ」

「いい話、ですか？」

おじさんの発言の意図が分からなくって、あたしは首を傾げた。おじさんはにやりと口角を上げた。

「ここから東に七千七百七十七歩歩いたところで、七日夜を過ごす。すると男が一人来て、魔神の話をするそう。男は魔神の入ったつぼが欲しい。それをとってきてくれたら男は千ディナールをくれる、と言っ…」

何故かおじさんはそこで一端話をやめると、あたしの様子をうかがうようにこちらを一瞥した。魔神の話に、あたしは自分でも無自覚のうちに食いついていた。

「それで？」

「そこでだな、男に一声かける。魔神のつぼを持ってきたら、金貨は要らないから他の魔神の居場所も教えろとな」

「え、それじゃあ意味がないじゃない。ていうか、男は魔神がほしいんでしょ？ それならそんな要求呑むわけないんじゃない」

ぐつと、おじさんは顔を近づけてきた。なんだかヒゲの触れそうなくらいに、近く。吐いた息がかかるくらいに近い。ごめんおじさん、ちょっと近すぎて口臭がくさい。

それに何だかおじさんの目が怪しく何かを企んでいるように見えってきた。なんて、あたし、人間不信？

おじさんはただ、もうかる話をしてきているだけなのに。

「それがなあ、男はもっと魔神のつぼがほしいんだ、だから手駒に

なる人間は多い方がいい……だからそこを利用してやりやあ、いいってわけだ」

話がイマイチよく飲み込めない。つまりは、その魔神がほしい男を利用してお金儲けが出来るということなのだろうか？ それでも、そんなに野心のありそうな男が簡単に騙せるなんて到底思えないんだけれど。

あたしのいぶかしんだのが分かったのだろう、おじさんは眉を寄せて鼻白んだ。

「いいか、なあ坊主。その男が居る場所ってのがここから東だ、どうだいつちよう行ってみねえか。おれは信用してねえが、話の種に行く分にはあ面白い話だろう」

気がつくとおじさんはあたしの両手を掴んでいた。力をこめて、強く。

「あの、痛いんですが」

「どうせ不景気なんだ、ぱーっと楽しい事でもやったるうじゃねえか」

「面白くも楽しくもねえ話だと思つがなあ」

その言葉に頷きそうになって、あたしは第三者の声に顔を上げる。くるくると首を回すと、あたしとおじさんの真ん中に手が伸ばされた。

見上げるとすぐ傍に、若い男性がいた。シーラーズと同じ年くらいだろうか。茶色の髪に、灰色の瞳。見たことのない男子だけど、さぞかし女の子に人気だろうなあという、精悍な顔立ち。シーラー

ズが文人が似合いそうな顔なら、彼はきつと武人タイプ。

「ということ、若いもんは若いもん同士仲良くやるうや」

ぐいとその男子はあたしの体を引き寄せた。あんまり密着されると困るので、あたしは自分で立つことにしたけど、まだちょっとよく状況を把握できていない。

おじさんのところ、カウンターのところから離れるはめになって歩かされることになる。

誰も座っていない席で座るように目で言われて、あたしは困ってしまった。

さっきのおじさんも、どこかうさんくさかったけれど、かといってこの青年を信用していいのかどうかも分からない。

「気をつけるよ、ああいうの最近多いんだ」

「ああいうの？」

相手が先に座ってしまったって、話の続きが聞きたかったあたしは同じ机をはさんで席に着いていた。ほとんど無意識で、だったけど。

「いかにも世間慣れしてない子供を、カモにするのさ」

瞳の端っこで、その男はあたしを馬鹿にしていた。あたしが子供で、世間慣れしていないと言っているのだ。何て失礼な。

「カモって何の？」

軽く嘲笑されたと判断したあたしは怒りにも似たものを声に含ませて言う。問いただすのも、腹がたっただけ。

でも自分が何の獲物にされていたかぐらいは聞いておきたい。
目を細めて男は答えた。

「景気が悪いからな、詐欺が増えてるんだが、さっきのは多分単純なおいはぎ」

あたしは口を引き結んだ。

「うまい話があるって人気のないところに連れ込んで、金目のものをいただく。あんた、身なりは悪くないからな。恰好の餌食だ」

単純な手に、まんまとのせられそうになっていたのか、あたしは！
ちよつとしたシヨックだった。

何て残念な手にのりかけていたの、あたし。一人で出かけるのが
久しぶりとはいえ、ちよつと不注意すぎないか、自分。

これじゃあ、シーラーズカラヴェハハーネに喫茶店に行くなと止められるのも無理
はない…のかもしれない。

くやしいから、彼にこの事は黙っておこう。

というか、ここに居たのが知られたら何をしていたか聞かれてしま
うかもしれない。面倒なことになるのかも。

「お前、どこかで会った事ないか？」

顔を上げると、灰色の瞳があたしの脳みその中身をのぞきこむよ
うにこちらを見ていた。

あまりにその瞳が真面目なものだったから、あたしは過去に彼と
出会ったかどうか思いをはせる。

幼い頃、一緒に遊んだ近所の男の子だったりするのだろうか。年
頃になってから会っていない遊び友達はいっぱい居る。そのうちの
一人だったりしたら、あたしが女だとバレてしまっ、というかバレ

ている、ということになるんじゃないかな。

それって、まずいかも。

結局あたしはこの目の前の男性を過去に会った人物ファイルの中から見つけられなかった。

「ない、と思う」

「どっかで会ったような……」

「ないない」

面倒なことになる前に、ここはさっさと撤退すべし。

今日ここであつたすべてのことを、なかつたことにするような素振りで爽やかに立ち去ることを決意。立ち上がると「じゃ、これで」と何気なさを装った。

「お勘定、お願いします」

店主に声をかけて、あたしは自分の財布に手を伸ばした。店主の提示したコーヒー代に、あたしの財布は驚きの真実を教えてくれた。

お金が、足りない。

ありえない。

コーヒー一杯の代金も足りないなんて。

バザールに出かける予定なんてなかつたから、お金をあまり持ってきてはいなかったのだ。だから、最初はシーラーズにたてかえてもらおうとしていた。そのシーラーズを振り切ってきて、これだ。

やってしまった。

今日はちよつとうっかりすぎる、あたし。

どうしよう。シーラーズを待つのは申し訳なさすぎるし、ここに

来てくれるか分からない。でもどうしようもないし。

「どうかしたか」

「あ、いいえ」

「財布の中身を忘れたんじゃないのか。シーラーズみたいに」

その青年にしてみれば、ただ身内の失敗談が前例として思い浮かんだだけかもしれない。

でも、そのシーラーズはあたしの知る人と一緒なのでは？

「……もしかして、シーラーズを知ってる人？」

男は、一度眉をはね上げてから、にやりと笑った。ちょっとだけ猛禽類を思わせる瞳で、あたしは小さく眉を寄せていたのだった。

7・カフェエハーネ

「金物屋サイドの息子、シーラーズの事か？ お人好しの」

「そうそう！ 知り合い？」

「というか、腐れ縁だな」

「ということは、やっぱりあたしの昔の遊び相手の中に彼はいたのかも。」

「って、それが分かっててもだから何だという話なんだけどね。」

「そつちの方こそシーラーズと知り合いとは、うっかりもの同士でお似合いだな？」

「うれしくない評価！」

「というか、そうだった。あたしは今支払いのお金が足りなくてそれどころじゃないのだった。」

「このシーラーズの知り合い（というか腐れ縁）の男にお金を借りるのは、申し訳ないし。初対面の相手に頼むことじゃない。」

「でも、もしかしたらそれしか道はないのかも。」

「そんなお金のことでは初対面の人を頼るのは嫌だったけれど、シーラーズの知り合いなら信用していいのかもしれないし、もしかしたらあたしの昔の知り合いかもしれないしね。」

「やれやれ。俺は食事代を立て替えておく星の下に生まれたのかな」

「そういえばまだ名前も聞いていなかったその男が、カウンターの上に小銭を置いているのを見て、あたしは目を丸くした。」

そうしてもらうつもりだったはずが、こつもことがすんなりいくと何故だか慌ててしまう。

そんなつもりだったけど、そんなつもりじゃない！

「そんな、悪いです。いえ、確かに今はお金がないんですけど」

そうだ、彼はシーラーズと知り合いなのだから、シーラーズを呼び出してもらえばいいのではないか。探し出すのはすぐにはいかないだろうけど、そっちの方がいいだろう。

ついさっきまでは目の前の彼に頼ろうとしていたくせに、あたしは新たな可能性に気づいた途端に、申し訳なくなってきた。

「別に構わんぞ。というか、おごりだ」

「そっちの方が申し訳ないです！」

あたしは更に慌てた。だって、そりゃコーヒー一杯くらい大した金額じゃないけれど、こつしてあたしがごねたために、相手に更に気を使わせてしまった。気持ちはうれしいのだけれど、父さんがお金にはうるさい方だからつい、こんなことでも気がとがめてしまう。とはいえあたしは変なところで頭の固いシーラーズではない。もう少し強引に来られたら、あたしはお礼を言っていただろう。

強引に、と思ったところで相手の顔がいやに近いことに気がつく。別段色っぽい雰囲気はない。何故なら目の前は新種の野菜でも見るような目であたしを観察しているだけだからだ。

でも、どうしてもその視線が嬉しいものには思えない。むしろ、居心地が悪い。

「あの」

「お前、もしかして……」

理由もなく、嫌な予感がした。

一番の懸案事項は、あたしが女だとバレてしまうことだから、真つ先に浮かんだのが正体がバレてしまったのでは、ということ。

あたしは自分の顔が引きつったのが分かった。目も、不自然に泳いでいるかもしれない。

喉が渴いてきた。

うづ、もう一杯コーヒーを飲みたい。

男が、口を開いた。

「カマラから離れる」

しかし耳に飛んできたのは、ここ最近でよく聞くようになった声。シーラーズのどこか勇ましい声。

「……アーデイル？」

目の前が遮られたと思ったら、それはシーラーズの背中中、目と鼻の先に迫っていたはずの男とあたしはシーラーズにより隔てられていた。

そしてそんな背中から、マヌケな声が響く。

あたしは首を傾げる要領で、そのままシーラーズの背中から顔を出す。ついでに壁になっていた男を見上げる。

「シーラーズ、やっぱりお前の知り合いか」

「シーラーズ、あんたの知り合い？」

ほとんど同時に問われて、シーラーズはしばらくあたしと男の間で視線を行き来した。

それからシーラーズは知り合いらしき男と目配せをするように視線を合わせた。その間、あたしはふと何かの気配を感じて首を回すと、空中に浮かぶマイムナー嬢を発見した。

未だに慣れることの出来ていない光景に、一瞬息を飲む。

マイムナーさん…！

今は姿が見えないモードになっているのだろうか、誰も彼女に構う様子はない。マイムナーはちよつといたずらっぽく笑うと、あたしに男たちの方を向けと顎を突き出した。

「カマラ、こちらはアーデイル。僕の友人だ」

いつの間にか初対面同士の人間を引き合わせる自己紹介の時間になつていたようだ。不可視の存在であるマイムナーを見ていたことなど気取らせないように、あたしは愛想笑いをしてみせる。

アーデイルは、あたしが何かに気をとられていたのに気がついてるかのよう、こちらをじつと凝視してみせる。なんだか冷や汗が出そう。

「アーデイル、こちらは……カマラだ」

シーラーズが一瞬ためらった理由に、あたしは数十秒後に気がついていた。

登場時に彼は既にあたしをカマラと呼んでいる。だから、そのままカマラと紹介したが、今あたしは男装をしているのだ。男らしい名前を出した方がいいのかどうか、迷ったのだろう。ハサンとか。アリーとか。

「ふうん……なあ、シーラーズ。言った方がいいのか？ 俺は気が

ついでしまったんだがな、この女」

「あああー！ そうだね！ ちょっと買いに行こうか！」

突然シーラーズは壊れた機械みたいに機敏な動きをしてアーディルの腕とあたしの腕を掴み、大声を出して動きだした。この喫茶店カフェエハーネを出るつもりらしい。

あたしの男装を隠したいのだろう、彼は。アーディルは「この女」と言ってしまったもの。あたしも驚こうとしたのだけど、先にシーラーズが奇声を発してしまったために、驚くタイミングを失ってしまった。

アーディルは自分で動き出していたが、あたしはシーラーズから解放されずに半ば引きずられるように店を出る。

その間、マイムナーの実に楽しそうな青い瞳と出会って、飛べるっていいなあと思った。

8・幼なじみたち

たどり着いた先は、バザールの中でも一際うるさい屋台の並び立つ広場の横だった。まだまだ日中だから、正直暑いけれど、日陰に隠れていればなんとかなる。

あまりに騒がしいので、会話には向いていないのではないかと思っただが、ここなら逆に周りに気を使う必要はないのかもしれない。どんな話をしようと、離れた場所では聞こえないのだから。

そのため自然顔を突き合わせての話し合いになる。

「アーディル。言わないでおいでくれるかな、さっきの続きは」

「別に隠すことはないだろう。俺も元からカマラを知っているんだから」

シーラーズの頭に、疑問符が沸くのが分かった。あたしも一瞬彼と同じ顔をしかけたが、可能性としてはずっと考えていたことを思い出す。

昔の遊び仲間。アーディルは、まだ幼い頃に一緒になって遊んだ、男の友達だったのだ。

「そうなの、カマラ」

「うーん…多分、そうなのかな」

本人に言われても、実はあたしはぴんと来ていない。

ついさっきだって、子供の頃の友人だと思って脳内の情報局に問い合わせたものの、目の前の男と一致する情報はなかった。だから今も、それは代わらない。

「ひでえ。まあ、かなり昔のことだから仕方がないか」

半分、嘆いているようなセリフではあったがアーデルの灰色の瞳は少しも悲観する様子はなく、むしろ面白がっているようだった。

「ごめん、あたし覚えてなくって」

「いいさ。男は背も伸びるしヒゲだって生やす。様相変わり過ぎるヤツはいっぱい居るからな。俺はまだヒゲは考え中だが」

ヒゲは普通、男性にとって一つの大人であることのステータスだ。アーデルもシーラーズも、年齢としてはもう子供ではない。生理的にヒゲも伸びる年頃だろう。だがまだ誇示するように長く伸ばしていないのは、どういった風に伸ばすのか決めかねているのかもしれない。アーデルが今言ったように、「考え中」なのだろう。顎に伸ばすか、口の上だけにするか。

年頃の娘は若い男性との関わりを減らされるものだから、ヒゲうんぬんについては、まったくのあたしの推測だけど。父さんに聞いても、若い感覚はなさそうだし。

「その分お前は変わらないな、カマラ。背も伸びてない」

男の子の謎についてあたしが思いをはせていたら、何てことを！
あたしは顔を突き出して、憤りを瞳にあらわにした。

「成長してないって言いたいわけ?!」

最後にアーデルと会ったのはいつだか覚えていないが、顔も覚えていないくらいだから、かなり昔のことだろう。そんな幼い頃に

別れた相手に、変わっていないと言われることがこんなに腹が立つものだとはあたしは今まで知らなかったわ！

あたしの身長は、確かに女性の中でも高い方ではない。でも、あんたら二人がむやみやたらに縦に長いだけだ！ くそう、なんか悔しい。

「そうだな」

「くっ、この減らず口をどうしてくれよう…！」

額をくっつけ合うかのように対峙する相手の暴言に、あたしの顔は引きつっていく。

悪ガキ時代のあたしがよみがえってきた。かつてあたしは、もやしっ子なシーラーズを筆頭に、気が弱そうだった腕力に訴えるを良しとしない相手に対しては、それはもう暴君のようにふるまったものだ。それを今、ここで、この男に同じ態度をしても構わないみたいね！

アーディルは今、あたしのひそかなコンプレックスのその二（身長が低い）をつつついたのだから。

「どうしてくれるのか、見ものだな」

「……………！！！」

まったく悪びれもしないアーディルに、あたしは怒りで言葉も出なくなった。筆舌しがたい暴言が頭をパンクさせる勢いで溢れる。

本気でどうしてくれようかね？！

「アーディル…よせよ。女性相手に失礼だろう」

「ああそうか、カマラは女だったか」

「ひねりつぶす」

あたしの背後で炎の柱でも吹き上がったかのように、シーラーズは目を見開いてあたしとアーデイルの間に挟まる。

そんなシーラーズの様子が悪ガキモード全開のあたしの気に入るはずがなく、あたしはなんとか彼をどかさそうと苦戦するが、図体だけはでかいシーラーズはびくともしなかった。

これだから、男つてのは無駄に力つけちゃって、中身はヘタレのくせに！

苛々と、足踏みをしながらあたしは不完全燃焼な気持ちでそっぽを向いた。

「二人とも昔からそんなだったっけ？　というか、僕もアーデイルとカマラとで遊んだ記憶はないんだけど」

「じゃあ、お前の居ないメンバーの中で俺とカマラは遊んでたんじやないのか。それでお前も俺の居ないところでカマラと会ってた」

子供時代の近所は意外に狭いものだ。もしかしたら、各自の住まい区分からして、アーデイルが言ったように三人が同じ場所で顔を合わせることはなかったのかもしれない。

それにしても昔のあたしは随分と忍耐強かったものだ。こんな腹の立つ相手を前にして、つき合いがあったのだというのだから。もしかして、アーデイルと戦って蓄積させたいぶんをシーラーズに八つ当たりすることによって発散していたのかもしれない。かつてのあたしなら、充分ありうることだ。

「そんなことどうでもいいよ。それより今日のこと、口にした瞬間

ぶん殴るからね」

シーラーズ越しに有言実行をモットーにした顔で睨みつけてやる。アーディルは鼻で笑って対応する。なんとまあ腹の立つ！

「どれのことだ？ その変装か、無銭飲食しようとしたことが、詐欺に引っかけりそうになった事か…」

「口を縫いとってあげよう」

「詐欺？」

あたしの絶対零度の怒りの声も、心配性の母親みたいな男の一声でかき消される。おっと。面倒なことになりそう。

ていうか、アーディル！ あんたが口をつぐんでいれば、シーラーズにはバレなかったものを。

やっぱり口を縫ってあげよう。あたしは例によって手先が不器用だから、料理よりもっと裁縫はひどいから、そりゃもう楽しいことになるだろう。

なんて、普通に考えたら猟奇的な思考も、今もただの現実逃避のようなものでしかなかった。何故ならすぐそこに、対応が面倒なシーラーズが迫っていたからだ。

「詐欺って何、カメラ。どういふこと？」

「ア〜〜ディル〜〜…！」

今度ばかりは怒りというより、恨むぞという怨念をこめてアーディルを見上げたが、彼は意外そうに眉を上げただけだった。

「未遂未遂。なんでもないよ」

「だって、ほらやっぱり。問題があったでしょう、カフェエハーネ喫茶店には」

咎めるような表情ながら、いささか勝ち誇るようなシーラーズ。
なんだその器用な顔は。

「ほほう、シーラーズお前、カマラを店に來させたくなかったんだな？ よかったな、通いの店にカマラが來たんじゃなくて」

「アーディルは黙ってて」

「え、シーラーズの御用達のお店は他にあるの？」

友人であるアーディルが居た喫茶店カフェエハーネだからつきり、シーラーズの通っているお店なのかと思っていたが、どうやら違うみたいだ。どうせならそっちの店の名前も知っておきたい。これは単なる好奇心、だけど。

「そうそう」

「僕の話はいいでしょ。それより詐欺未遂にあったってこと？ アーディルもその場に居たの」

ああもう、また話が面倒なことに！

シーラーズは保護者気取りなのか、あの話をきっちり聞くつもり
のようだ。もう、困るなあ。

あたしは思わず、天からの助けを請うように辺りを見回してしま
った。何も助けになるものはないと、思いかけたその瞬間に飛びこ
んできたのは傾国の美女が空に浮遊する姿。

マイムナー！ 助けて、この場を何とかして。

必死というほどでもなかったが、あたしがあまりに困った顔をしていたのが彼女にも分かったのだろう。苦笑をするように目じりを下げると、マイムナーはゆっくりと地上へ降りてきた。きよろきよろと辺りに注意を払うと、少しの間姿を消してから、またこちらへと顔を見せた。

今度は浮遊しないで、足で歩いてくる。満月よりも美しいマイムナーを、幻でも見たかのように振り返っていく人たち。そうか、姿が普通の人にも見えるようにしたのね。

マイムナーはその美貌をおしげもなくさらして、こちらへ向かってきた。

「こんにちは、シーラーズ。何かもめているの？」

突然の声に、シーラーズはすぐには対応できなかった。理由はたぐさんあるだろうが、そのうち一番の理由はマイムナーの、恋した相手に見惚れていたからだろう。開いた口がふさがらない姿から想像するのは簡単だ。

ふと、あたしはアーデイルも静かになったのに気がついた。さすがに彼も、マイムナーのような美女に出会ったことがなかったのだろう。言葉もないように目を見張っている。

ふふん、きれいでしょ、彼女。と何だかあたしが誇らしくなる。いえ、ここは女としてマイムナーの美貌に嫉妬するべきなんだろうけど、そういったレベルを超えているし、今は彼女はあたしの味方なのだ。

「あ、マイムナー、^{ヒジャーブ}被り物！」

ずっと魔神としてすごしていたマイムナーは^{ヒジャーブ}被り物をかぶってはいなかった。豪華すぎるその金髪がこぼれんばかりに輝いている。

魔神だから、と何だか常識とは切り離していた今までだが、こころも人が多いところでは目立ちすぎる。あたしは自分のターバンをほどくとマイムナーに抱きつくようにしてかぶせてやった。男は被り物をしていなくても、さほど問題はないはずだから男装中のあたしよりマイムナーにこそ被り物は必要だ。

慌てた様子のあたしに飛びつかれて、彼女は少し驚いたようだけど、ありがとうとほほ笑んで返した。うう。美人ってやつは、同性まで魅了するんだから困る。

月が雲に隠れたのを惜しむように、二人の男たちはマイムナーが被り物をしたことによって落ち着いてきたようだ。美貌にあてられたのから立ち直った、というべきか。

「それで、こちらの美しいお嬢さんはどちらの方かな」

何だかからかうようにも見える瞳で、アーデイルはあたしとシーラーズの方を見た。

魔神さんです、なんて言えなくて、あたしはシーラーズと顔を見合わせた。

9・幼なじみたちと女魔神

天の助け、天使ジブリールの再来かと思われたマイムナーは新たな問題の火種になりかけていた。こう言っては失礼かもしれないがこのアーディルに嘘は通用しない気がするから、厄介なのだ。まさか魔神だと言うわけにはいかないし、信じてもらえないだろうし、それならば嘘をつく必要がある。ただそれを看破されそうなので問題なのだ。

「ごめんマイムナー、あなたの偽りの肩書き一つ思いつかないあたしを許して。」

元から典型的なガキ大将だったあたしは、嘘の下手な悪ガキだったのだ。まだ力の差が出ない子供の時分、腕力にものをいわせて近所の子供を黙らせていたあたしは、嘘のつけない子供だった。それは今も変わらない。ささいな嘘ならまだしも、他人の身分を詐称するなんて、ちょっととした冒険だ。

「えっと、アーディル……こちらは、マイムナーさんだ」

そんなあたしを知ってか知らずか、シーラーズが果敢にもアーディルに立ち向かった。マイムナーと目で会話して、彼女が問題ないといった視線を返したからだろう、名前はすんなりと紹介された。

「マイムナー、こちらアーディル。僕の友人だ」

「よろしく」

花がほころんだようにほほ笑む美女に、アーディルはにやりと笑った。何だその曲者じみた意味深な笑みは。まるで男女間の色恋沙汰のかけひきに慣れたかのような様子。

「で？」

「え？ 何が？」

シーラーズは精一杯純真無垢な青年を演じてみせる。まあ、普段とあんまり変わりがないんだけど、とにかく今はマイムナーについてどうにかごまかそうとしているのは間違いない。マイムナーの方は、素性を話されても問題なさそうに見えるのだけけどね…。

「どこの娘さんだよ、なあシーラーズ」

シーラーズは問われてうつむいた。考えこむように眉間にしわを寄せて、正直に話すかどうか迷っているのだろう。

と、シーラーズは顔を上げてほほ笑んだ。あたしに向かって。

「そろそろ帰ろうか。もう日も大分傾いてきたし」

「そ、そうだね」

逃げることにしたようだ。シーラーズに反対するあたしではなく、嘘の苦手な人間が二人では逃げるしか他に道はなさそうだと気がついたのだった。あたしはマイムナーにも即時退却の旨を伝えると三人で逃げ出そうとした。

「待てよ。お前ら何か、隠してるだろう」

「離してよ」

間近に居たのがあたしだからだろう、アーデイルはあたしの手首

を捕まえた。振り払うには力が強すぎて、逃れられない。声に嫌悪と苛立ちをのせてもアーディルは動じる様子はない。それどころか、揶揄するような瞳でもってあたしをなじる。

「おごってやったのも忘れたのか、カマラ。この恩知らず」

「んな！ そんなのあんたが勝手に払ったんでしょ！」

「へえ。コーヒー一杯の代金も持ってないくせに店に入る方がどうかしてると思うけどな」

「だって今日は…！ ていうか、手、離してよ」

「マイムナー」

後ろの方で、シーラーズの声がしたかと思つたら、あたしの手はあつという間に自由になった。ぐいと腕を後ろに引っぱられ、あたしは倒れそうになりながらも誰かに支えられた。

突然空が暗くなったように感じて顔を上げれば、大きな影が出ていた。それは、大きな布がアーディルに覆いかぶさるその姿だった。

「今のうちよ！」

いつの間にやら空へと飛び上がったマイムナー、それからあたしを引っぱるシーラーズ。

「ちょっとコラ待て！」

大判の布の下に人の形のようなものが出来ていて、それが声をあ

らげていた。アーデイルがマヌケな姿になっている隙に、あたしたち三人は逃げ出した。

別に心にやましいところなんてないのに、こんな風に必死になって逃げ出すのも何だかおかしかった。それに、あのアーデイルの格好といったら！今は見えないけれど、ざまあみろって、こういう時に使うのだけわ。

あたしが笑っているのが分かったのだろう、呆れたシーラーズがすぐそこに居て、マイムナーも声を上げて笑っていた。

「面白いわね、あなたたちって」

ああして平然と空を飛んであたしたち地上の二人についてくるマイムナーは、きつと他の人間には姿が見えない状態なのだろう。そうでなきゃ、今頃「美女が空を飛んでいる！」と叫ぶ声が聞こえるはずだから。あたしと、シーラーズにしか視認出来ないのだろう。

シーラーズが声をかけていたから、アーデイルに布をかけたあたりたしの手を解放させたりしたのは、マイムナーのおかげなのだろう。魔神だから、魔術を使って助けてくれたのだ。それにしても、屈託なく破顔するマイムナーにはちょっとときどきしちゃう。それをごまかすように、あたしはまた声を出して笑うことにした。

「いやあ、笑いをとるつもりはなかったんだけど、アーデイルが何だか面白かったよね」

「アーデイルが誰かにしてやられるなんて、滅多にないんだよ」

きつとシーラーズもいつもアーデイルにいいようにされているのだろう。シーラーズってば、明らかに見た目からしていじられキャラだから。いじめられているわけでもないだろうから、いじめっ子

の失態を言ぶようなものではないが、シーラーズも愉快そうだった。

「お手柄、マイムナー」

ふふ、と美女魔神は目を細めた。

ゆっくりとあたしとの距離をつめてきて、マイムナーはあたしに小声で耳打ちした。

「（シーラーズ、とても必死な顔してたわ。よっぽどあなたが大事なだったのね？）」

魅惑的な瞳は、いつそ艶っぽくさえあってマイムナーの形のよい唇から目がはなせなくなる。

っていうか、今彼女は何て？

「（そんなの、あのお人好しだもの。幼なじみくらい、大事でしょ）」

変な意味ではないと否定したいのに、自分で言いながらシーラーズに大事に思われていると自分自身で言うのは何だか間違っているような気がしていた。だって、文字通りに受け取れることは出来るけど、きつとそこには友情以上のものは何もないもの。シーラーズはきつと、腹をすかせた子犬にだって情けをかけるような人間だもの。あたしだって子犬と変わらない。

「（そうかしら？ 幼なじみ以上のものが見えたけど）」

シーラーズの恋する瞳をその身に受けていながら、まったく気がついていないようなもの言い。マイムナー、あなたこそシーラーズに好意をよせられているのよと言いそうになってぐっと耐えた。

だって、あたしは今の感じが楽しいから。アーデルを撒いて、三人で笑った時に、近年ないってくらいに笑っていた。楽しかったから、シーラーズにこれ以上何かを望むつもりはない。シーラーズのマイムナーへの恋を応援するつもりもない。

みんなで、友人同士で、いいじゃない。

それがあたしの出した答えだ。

後になって思えば、あたしは恋をするにはまだ子供すぎたのかもしれないってことだったけど、でも、マイムナーの言葉で確かにシーラーズを意識するようになっていた。

これまでになく。だからこそ、その気持ちをかき消すことに決めたのだ。だってきつと、どうせ恋なんかしても、他に婚約者は用意されるのだ。失恋が前提の恋なんて、進めようとは思わない。

それに……シーラーズが好きなのは、マイムナーだ。確認しなくたって分かる。シーラーズには今、友人のあたしがいて、好きになっちゃった女魔神のマイムナーが居る。とつてもきれいなマイムナーを好きになるシーラーズが、あたしを好きになるはずがないのだ。

はじめでもない「これ」は、諦めるに限る。

もう、あたしはマイムナーの言葉に取り合わないことにした。

マイムナーがあたしたちの前に姿をあらわして、七日がたっていた。普段は根無し草そのもののように、魔神らしくあちらこちらを行き来しているのか姿を見せない。かと思えば神出鬼没でまだ慣れることのないあたしの目の前で突然姿をあらわして驚かせてくれる。そんな風に現実とはどこか離れた存在だからだろうか、マイムナーとは濃い時間を過ごしていて、彼女が突然姿をあらわすのも当然のことに思えるようになってきた。

あれから、アーデイルにコーヒー代を返すようにとシーラーズにお金を渡したが受け取ってもらえなかったそうだ。シーラーズはどついたらいいか分からずに、あたしにお金をそのまま持ってきた。また彼に会う機会もそうないだろうから、とりあえずシーラーズにまだ持たせたままにすることにした。

アーデイルはあたしたち三人が逃げ出したことに怒ってはいたが、それを盾にどうこうするつもりはないらしかった。シーラーズによると、怒っているというより面白がっていたとか。あの布がどこから来たのか分からなかったから、少し悔しがっていたとか何とか、まったく、アーデイルという存在がよく分からない。

あたしはというと、シーラーズとはそう頻繁に会うわけじゃないけれど、マイムナーを通して以前より交流するようになっていた。幼い頃なんかはもっと毎日会っていたけど、その頃は除く。

マイムナーとももっと仲良くなっていた。彼女はあたしとは違う感覚を持っていて、それが魔神だからかなのかは分からないけれど、あたしとは違つとところで何かに面白がるのが、新鮮だった。

夜眠る前にするおしゃべりは恒例となっていて、あたしはマイムナーに魔神の世界のことを聞いたり、魔神の女の子がどんなことに

興味を持つかなんかを聞いたりしていた。マイムナーの方も、人間が好きだと言っていただけあって、あたしの話すことはどんなことでも楽しそうに聞いてくれた。

マイムナーは、今まで居た他のどんな女友達よりも頻繁に顔を合わせていたから、ずっと前からの知り合いのような気がしてきていた。とても気が合う、というわけではないのだけれど、マイムナーとは気のおけない間柄になろうとしているのを感じていた。彼女には、時々プライバシーがないのだけれど、魔神だからといって人の機微が分からないのではない。時にあたしなんかよりももっと他人の心を深読みしようとする。

それからマイムナーの達観した大人のような素振りに、あたしは嫉妬どころか憧れに近いものを抱いていた。相変わらず、シーラーズが彼女をぼんやりと見ているのを見ると、あたしはちょっと居心地が悪いけど、シーラーズがいなければ問題ない。

「マイムナーに気持ちを伝えようかと思うんだ」

だから、そういうことを、言ってくれさえしなければ、あたしはもっと冷静でいられたはずなのに。ねえ、シーラーズ。

その話、聞きたくない。よっぽどそう言おうかと思った。その代わりに黙りこむことにした。先を促すように頷いて、「ごまかす。

「彼女は…とつても、素晴らしい女性だ」

人間じゃないけどね。

昼下がり。シーラーズはいつかと同じように、ひよっこり窓の外から顔を出すとマイムナーが居るかどうかが聞いてきた。あたしが出かけていると答えると、大きなため息をついた後に告げたのだ。気持ちを伝える、と。

「でも、魔神なんだ」

ぼつりと、何気なくこぼされたかのような一言。でも、シーラーズその顔を見れば、そうではないことがよく分かる。まるで身内が病気になっていてどうしたらいいのか分からないかのような、苦痛をこらえたような表情。

ああ、そっか。シーラーズは、恋をした相手が魔神だから悩んでいたんだ。それは、身分とか種族が違うからというものより、マイムナーが魔術でいつ自分の手の届かないところへ行ってしまうか分からないから、気持ち焦っているのだ。

彼女は神出鬼没で、そうと望めばいつでもあたしたちにも見えな存在になってしまえる。そこに居るのにいない、そういうことが出来てしまう。

長い間ランプの中に閉じ込められていて、助けてもらったあたしたちに恩義を感じているためか、こうして今は近くに居るけど、元の居場所に帰りたいに決まっている。

マイムナーは旅人のようなものだから、ずっとこのバグダッドの町にはいられない。

それをシーラーズは知っているのだ。

「そう……だね……」

さびしいなあ。素直にそう思った。マイムナーがいなくなってしまうたら、またシーラーズとの交流もなくなってしまうだろうし、何より彼女に会えなくなるのだ。

シーラーズなんか、マイムナーのことがとつても好きなのだから、あたしなんかよりもさびしいのだろう。だから、そうならないように、思いを伝えたいのだろう。

「…どうしたの、カメラ。眉よせて」

言われるまで気がつかなかった。あたし、きっと今情けない顔してる。

何がどうしてこうなったか分からないけど、叫び出したくなった。でも、部屋にこもって布団の中にもぐりこみたかった。胸の真ん中あたりがきゅつとする。ちょっとだけ、息が苦しい。

心臓が奇妙に暴れているような、体の奥底に沈みこもつとしてい
るような、妙な違和感がある。

落ち着かない。すつごく、落ち着けない。

やだな。何か、今までに感じたことのない感覚が体を駆け巡っている。

心配そうにこちらを見る、シーラーズの顔も、すつごくいやだ。
見たくない。

「具合、悪い？」

「なんでもない」

こつちを見ないで。あたしの方から顔をそらした。

「それより。好きなんでしょ、マイムナーのこと」

一息に言うと、思ったよりも簡単に言葉が出た。ああ。言っ
てしまった。

うつん、何てことのない言葉だ。だって、事実だから。
みるみる、顔の赤くなるシーラーズ。ほらねやっぱり。分かりや
すかったから、今更だけど。

ちりちり、あたしの中で何かがくすぶる。

「伝えなよ、早く。やっぱり、ほら、ね」

あたしはもはや何が言いたいのか自分で分からなくなっていた。ただ余計なことを言わないように、あたしはしゃべり続ける必要があるんじゃないのかなと思って、シーラーズの顔も見ないで思いつくかぎりのことを言った。

「だってさ、マイムナーももしかしたら他に気になる人ができるかもしれないし、そんなことになる前に早くね。あんたさ、どんなとこ好きになったの、彼女のこと。そりゃ、あれだけの美人他にいないし、いいところいっぱいあるから、分かるけど」

違う、間違えた。こんなこと聞くつもりはなかったのに。

だって、あたしはそんなこと、聞きたくない。シーラーズの耳から、マイムナーのことを愛しているとはまだはつきり聞いてないけど、明白なのは分かってる。でも、まだ彼自身の言葉で聞いていない。聞きたくない。

シーラーズは照れたように自分の頭をなでた。困ったようでもあったが、拒むつもりはないようで、口ごもりながらも答えてくれた。うれしくなかったけど。

「……最初は、何て美しい方だろうと思った。でも、それだけじゃないんだ。マイムナーは……すごく……遠い目をしている。普段や、故郷の話をしている時もその瞳がかげる事はないのに、ふとした瞬間にとてもし深い瞳で遠くを見つめているんだ。彼女の住む故郷よりも、もっと遠くを見るように……」

そういうシーラーズの方こそ、地球の裏側よりももっと遠く、宇宙の果てでも見ているような黒い瞳をしていた。あたしなんか隣り

に存在してないみたいに、果てのない世界の先を見ている。
どくどく、心臓が悪くなったみたいに鼓動を打つ。

「それ以来、彼女の事が気になって仕方がない。マイムナーは、思
いやりのある女性だし、とても優しい。僕は……」

はっとしたように、シーラーズは口をつぐんだ。何を思ったのだ
ろう。あまりの惚気のろけにあたしがうんざりしたと気がついた。なん
てことは、ないんだろうな。

ただ照れくさくなっただけだろう。シーラーズはしばらく、迷子
みたいに視線をさまよわせていた。それを横目で見ながら、あたし
はまたそっぽを向いた。

「…あのね、それ、マイムナーの前で言った方がいいね」

からかうような声に、聞こえただろうか。いつものあたし、いつ
ものあたしを思い出しながら、表情作りに挑戦する。

あたしは、シーラーズの背中を押してやらなくちゃ。だって、こ
のヘタレは本人に言う前にあたしに思いを伝えようとしてるんだも
の。マイムナー自身に言わなくっちゃ。そんなことも分からないな
んで、本当に鈍いな。

「そう、だね」

いつ消えてしまいかも分からない、か細いロウソクの炎のような
存在なのだから。

マイムナーは、魔神だから。

見なくても分かった。シーラーズの考えていることが、よく分か
った。声の調子で伝えてくるんだから。

顔は見たくなかった。声も聞きたくなかった。そんな消え入りそ

うな声。誰かに恋焦がれて、胸騒ぎを抑えるような声。

あたしの心を、動揺させるような声。

体の中心から石になってくみたいに、重くなってゆく。心臓が、痛い。

全身が脈打つのが手に取るように分かる。

「……だ……」

「え？」

「ちが、あ、早く、行きなよ、マイムナーのところに」

シーラーズには聞こえもしなかっただろう言葉を、否定するため顔を上げていた。咄嗟だった。何てことのない顔をしていた自信はないけれど、もう言葉でごまかすしかなかった。

「マイムナー、きっとよろこぶよ」

だから早く行って。

背中を押してシーラーズを締め出した。

「がんばって」

心にもないことを口にして、木製の窓を閉じる。室内に訪れるのは薄っすらとした暗闇。

追い出す前にシーラーズの顔も見れなかったけど、見たくなかったからいいんだ。

『……やだ……』

行かないで。

外に飛び出そうになった言葉を、呑みこむのであたしは精一杯。表に出そうになった感情を、押し殺すのでやっとだ。

行かないで。

いやだ。

マイムナーに告白なんてしないで。

そんなこと言う権利なんてあたしにない。

だって、自分自身もごまかしてきた気持ちなんだから。騙してきただから、そんな言葉は隠さなくちゃならない。

マイムナーはどうするのかな。故郷にいい人がいなかったら、シーラーズからの言葉をよるこぶんだろうか。

婚約しちゃうのか、魔神が相手だから分からないけど、もし承諾したらシーラーズは魔神の国に行くのかな。

それともマイムナーがシーラーズの家……。

頭まで、痛くなってきた。不安が体から出ていかない。気分が悪い。

考え事をすると辛くなってきたので、あたしは昼寝をすることにした。長い昼寝を。このまま明日の朝になっていたって構わない。

自分の部屋で、布団にくるまって丸くなって寝よう。子供みたいに。

どうしてか急に、まだ幼い頃に戻りたくなった。一瞬かすめる、子供の時の記憶。笑い声。頭が重くなったから、振り払うように首を振って、自室に戻った。

昼寝をしても、明日の朝になるまで寝ることは出来なかった。日没の礼拝の時間を告げる呼びかけ^{アザーン}があたしを叩き起こしたのだ。長年の習慣とアザーン、おそるべし。

頭痛とか、胸のざわめきとかはなくなっていたけど、眠る前よりすっきりしたということはなかった。むしろ、変な時間に眠り変な時間に起きてしまったために礼拝を済ませても、頭の中はもやもやとしたままだった。

ぼろぼろとこぼれるように、ふて寝する前の記憶がよみがえってきて、あたしはなんとも言えない表情になった。

ああ、もう、全部なくならないかな！ 過去のあたしのでかしたこと、全部！

よく分からないけど不機嫌になっていく。

もう一度シーラーズに同じことを言う未来が待っていても、あたしは人生をもう一回やりなおしたいような気分になっていた。

やっぱり、止めていたら。違う、あたしは、シーラーズの告白を止めたいんじゃないかと、もっと……こう。

「違う違うー！」

考えそうになった「それ」を、間違いだと断定する。

それより、いつものように家庭内の仕事をしよう。使用人がいるとはいえ、一家の主の女の家族は家を守らなくてはならない。散らかった家にしないと、戸締りがしっかりしてあるとか。

あたしは部屋を出て、体を動かすことで頭を働かせないようにすると決めた。

「カマラ」

やっと慣れてきた、人の背より上方からやってくる、声。言わずもがな女魔神マイムナーさんのもの。

慣れたはずなのに、シーラーズが余計なことを言っていたのを、これまた余計なことなのに思い出してしまい、あたしは振り返るのが難しいことだと知った。

笑顔笑顔と心で唱えると、普段通りを装ってマイムナーを振り返った。

「マイムナー。今日はどこへ行っていたの？」

声に感情がないのが、彼女にも分かってしまったのだろうか。美しき女魔神は表情を固くしていた。真面目というのか、平素の気軽さはなくなってしまったような、決意を秘めた顔。

……やっぱり、あたしに何か言いたいことがあるのね。あれとか。それとか。ていうか、一つしかないだろうけど。

「カマラ、話があるの」

ここではちょっと、と言いたいのが分かって、あたしは出てきたばかりの自室にマイムナーと戻った。夜のおしゃべりを彼女とする時に座る、寝台に腰掛けてあたしは先をうながした。もう、彼女の言いたいことは分かっているけどね。

胸のあたりはキリキリしたけど、頭が重くなるほどではなかった。予想、してたから。

「話って？」

「うん。あのね、わたし故郷くにに帰ることにしたの」

「それはつまり」

ぎゅっと気道が押しつぶされた気がした。

シーラーズと一緒に、魔神の国へ行くことに、した？

もう一気にそこまで飛ぶ、わけ。

「いつまでもここに居られないしね」

「……うん……」

だって、シーラーズの気持ちが伝わって、一緒に故郷に帰ろうという気持ちになったのなら、ここに居る必要はないよね。

「二人にはとつてもお世話になったけど、結局ちゃんとした恩返しが出来てないし。でも、そっちは考えてあるわ。わたし、魔神がいつまでもいたらと人間たちの間を意味もなく浮遊してはいけないと思っの」

でも、シーラーズは違うんでしょ。だから一緒に、連れて行くのよね。

「本当は、さびしいからお別れはしないでおこうと思ったの。でも、カマラにだけは挨拶しておこうかと思って。シーラーズにもよろしく言っておいて」

「うん……二人で一緒に……って、え?!」

今のはまるで、シーラーズにもあたしにもさよならを言っつもり

がなくて、でもあたしにだけはと思ってここに来た、みたいなもの
言いじゃなかったかな。

それってつまり、シーラーズの告白なんか断って、それでもう故
郷に帰るとか、そういうこと?! 一人で?

「え、だって、え? あれ、マイムナーさっきまで何してたの、シ
ーラーズに会った?」

わたわたと無駄な身振り手振りで慌ててものを問うあたしを、満
月みたいな美女はきよとんとした顔で見っていた。

「会ってないわ。今日はちょっと、最後にとまって町の上空を浮遊
してたの。町の全景が見えるから」

まあ、魔神っていうのはそんな高いところまで行けるのね、本当
にうらやましいわ。
じゃなくて。

「えつとー、こくは…あわわ。じゃあ、今日はシーラーズに一目も
会っていないの?」

ええ、と美魔神は首を縦に振った。

それじゃあつまり、シーラーズは今日はマイムナーに思いを伝え
るつもりでいたのに、出会えなくて、一方マイムナーはそんなこと
を露知らず、故郷に帰ろうとしているのか!

つい、本人がまだ言っていないことをあたしが口にするのはいけ
ないと思って、シーラーズが今日どうするつもりだったかを言葉に
はしなかったけど、これは引き止めた方がいい気がする。だって、
このままじゃ二人はすれ違ってしまっ!

これがもつと他人事や、相手がシーラーズじゃなかったら、あたしの顔は素直に血の気が引いていただろう。愛する人が自分に別れも告げずに町を去ろうとしている、そんな若者に同情しただろう。でも、今回はわけが違った。確かに焦ったけど、でも、あたしは今すぐシーラーズを捕まえに走るほどには衝動的にはなれなかった。でも、本当に唐突すぎて、あたしだってまだマイムナーには消えてほしくない。

シーラーズの告白が原因でこの町を去るものだと思っていた頃は、話が違う。ある日急に友人が遠い国へ引越すとされたようなものだ。

「でも、急すぎるよ、マイムナー」

「ごめんなさい。でも前から考えていたことだから」

あたしにとつてはとても急転直下の出来事なんだけど。どうしても彼女を引き止めることは出来ない知りつつも、やっぱりあたしも名残惜しい。

「いつ、町を出るの?」

魔神の力があれば遠くへ行くのも大変ではないだろうが、あつという間ということもないだろう。とはいえ昼夜関係なしに彼女は飛んで行ってしまいそんな気がする。

「そうね、今すぐにも」

「い?! とつても急ね!」

さすがに今すぐには思わなかった! なんて性急なのか。せつ

かちっていうか何ていうか。

「待つてよマイムナー、心の準備が出来てないよ、あたし」

「でも、わたしも別れは辛い。だからこそ、さつと町を出ちゃおうと思つて。帰り道に少しダマスカスに寄りうとは思つてるけど、町を出るのは早い方がいいわ」

潔い。むしろかつこいい。さっぱりしているともいえるのかな。魔神相手だから分からないけど、こつこつあつさり言われちゃうと、なんだかかえつて当然の成り行きに思えてきた。

マイムナーはどうあつても、今日、バグダッドを出て行くのだ。それは変えられない事実のよう。

「待つて、やつぱりシーラーズにも別れの挨拶を」

言つと、彼女はちよつと複雑な苦笑をした。言いたいことはたくさんあるのだけど、全部は言えないと知つているかのよう。

「彼の悲しむ顔は、見たくないわ」

マイムナーはあたしよりも、シーラーズに抱いている気持ちがあつた。胸はちくちく痛んだけど、何故か苦しくはなかつた。

ああ、そうなんだつて、思つた。

マイムナーも、シーラーズのことを別れが辛いくらいに顔を
見てしまえば、故郷に戻れなくなつてしまふと思つほどに、強い感情を抱いている。

そうなんだ。

「……そっか。…でも、何も言われない方がもつと悲しいよ」

きつとそうだ。そうに違いない。シーラーズが今ここに居ても、黙っていなくなつたのを後から知らされた方がもつとずっと、辛いに違いない。断言できる。

あたしも、シーラーズが悲しい顔をするのは、見たくはないな。彼が告白するのも嫌だけど、それよりもつと嫌だ。シーラーズには時々、彼自身の感情を他人に感染させる力がある。いつかがそうだ。まだ、幼かった子供の頃。飼っていた子猫が死んだと悲しむシーラーズに、あたしは数回しか目にしていない子猫の死を悼むことなど出来ないだろうと思っていた。それなのに、泣いたシーラーズがそこにいて、なぐさめようと思っていたのにあたしは一緒になつて涙ぐんでいた。

魔神のランプに好奇心をかきたてられた時もそうだ。力、なんて大げさだけど、シーラーズは近しい人に感受性を強くさせてしまようなところがある。

そう、だから、あたしもあたしが悲しくなるのが嫌なんだ。別に、シーラーズ自身が悲しいのが嫌つてわけじゃない。嫌だけど。でも、変な意味はない。ただの幼なじみの友人なんだし、問題ない。

「ごめんね」

青い瞳は、生き生きとして輝いていた普段の様子ではなく、儚げにゆらめいていた。マイムナーは、もう決意を変える気はないようだ。

もし今あたしが、シーラーズを呼びに行ったとして、その間にはもうこの町から姿を消しているだろう。

もう、シーラーズとのすれ違いは決定事項なのだ。

「そんなのって……！」

「あのね、恩返しにと思って、魔神の世界の宝石を取り寄せたわ。シーラーズの家にも置いてきたから、カマラも受け取って」

「そんな…」

マイムナーのたおやかな指が差した先には、魔術で出したのだろう、まるまると太った布袋があった。両手で持つには大きすぎるが、担ぐには少し小さい程度の袋で、中にはマイムナーの言う魔神の宝石が入っているのだろう。

そんなものがほしかったわけじゃない。あたしは、宝石なんか要らない。

ただ、こんな風にいきなりいなくなると言わないでほしかった。

相手が人間なら、よほどの遠い国ではないかぎりまたいつか会える。でも、マイムナーは魔神だ。魔神の国がどこにあるのかなんてあたしは知らない。それどころか、彼女が会いたいと思ってくれなければ一生マイムナーには会えないのではないかという気がする。

「もうバグダッドには来ないの？」

「そうね、しばらくは大人しくしてるつもり」

そう言われても、マイムナーとは今生の別れのような気がしてならない。

「……また会える？」

「と、いいけど。わたしはこれでも、魔神をたばねる王の娘だから。」

帰ったら何て言われるか」

そういえば、そんなようなことをマイムナーは何度が言っていた。人間の世界の王様でも、あたしには微塵も関係ない存在だから、つい何とはなしに自分と関係ないものと考えて聞き流してしまっていた。

そうか、王様の娘なら王女様みたいなもので、故郷に帰ったらあちこち自由に動き回れないような高貴な存在なのかもしれない。マイムナーがあまりに気さくで、美しいけどお高くとまったところがないので、そんなこと考えもしなかった。

「ありがとうね、カマラ。シーラーズにもそう伝えて」

あ、行っちゃう。

「待ってって、やっぱり急すぎるし、シーラーズには直接言って」

ゆるゆると、マイムナーは首を振った。声に出さないことよって、より一層その強固な意思を感じた。

音もなく、女魔神は浮かび上がる。

「楽しかったわ、本当に」

行っちゃう。マイムナーが。シーラーズの想い人が。

「待って！」

「助けてくれてありがとう。それから、楽しい思い出も」

だめ。そんなのずるいよ。

二人は、両想いなのに。
そうなんだよ、想っているのは二人とも同じなんだよ！

「さようなら、カメラ」

言おうと、思ったのに。

ほほ笑みが幻だったのだと思うほどに早く、あっという間に女魔神は消えていた。

その部屋に残ったのは、天上を見上げるあたしと魔神の置き土産、それからいつもと変わらない寝台や家財道具。

あたしを含め身動きしないものばかりの部屋に、もうマイムナーの居た痕跡はなくなっていた。

あたしは、父さんが帰って来て、あたしの部屋の戸を叩くまですっとその場に立ち尽くしていた。ずっと。

12・欠落感1

「よお、カメラ。元気か」

ここ最近、あたしは何故か、どうしてか、わけが分からないけどアーディルとの会話を増やしていた。別に仲良くなるつもりはないが、この原因を作っているのが誰だかは分かる。

その原因があるからといって、そう頻繁に顔を見せなくてもいいのだけど、アーディルはこうやって今日もうちへとやってきた。シーラーズがそうしていたように、窓を境にしてではあるけれど。

きっかけはこうだ。

シーラーズが意気消沈して、仕事場でもおかしなことになっているから友人であるアーディルのもとへと話が行った。そこで本人に聞いたとしても埒が明かないのであたしのところへとアーディルはやって来たのだった。

シーラーズの元気がない理由を知ったアーディルは、以来こうしてあたしのうちに入り浸るようになってきたのだ。

そこで、シーラーズを元気づけるつもりがアーディルにはさほどないことがよく分かるのだから、あたしとしては本当に何しにうちに来ているのかわけが分からないのだけど、とにかくまあ、いなくなったマイムナーの代わりといわんばかりにうちへ来る。

「昨日のあたしが死にそうに見えた？ あんたこそちょっとは病気になってみなよ。それでしばらく床に伏してな」

歓迎していない旨をあたしが伝えると、アーディルは相変わらずのにやにや顔でのれんに腕押し。

「それよりあんたシーラーズの友達なら、シーラーズの具合を心配したらどう。あたしなんかよりあいつの方がよっぽど病気みたいじゃない」

刺のある言い方で、今にも噛みつかんばかりの勢いであたしは言っただのに、アーデイルはぐっと顔を寄せてきた。

「俺にはお前の方がよっぽど落ち込んで見えるんでね」

迫り来る灰色の瞳は、あたしの感情をあたし以上によく理解しているように見えて、あたしは怯んだ。

そんなはず、ない。

だって、シーラーズは愛しい人に何も言われずに去られたから、落ち込む理由になるしよく分かる。対するあたしは、マイムナーに別れも告げられて、急だったけど事の成り行きをちゃんと知った上でマイムナーと別れられた。突然親に捨てられたみたいな衝撃を受けていいのは、シーラーズだけ。

「お前がマイムナーって女が町を出たって言いに来た時の顔、知らないのか？」

あたしがシーラーズの元に向かったのは、マイムナーが消えてからすぐのことだ。もう夕暮れ時を過ぎて、暗くなっていたから夜陰にまぎれてシーラーズを探した。いつかの喫茶店や、バザールに居るのではないかと走り回って、夜の礼拝が終わった後にやっと見つけることが出来た。その時、アーデイルも居たものだから話は今こっぴどくやっちゃんとしてるわけだけど（ちゃんと事情を伝えたのはちょっと後で、マイムナーが魔神だっていうのは言っていないけど）、あたしに自分の顔がどんなだったか、推し量る術はない。あの時は必死だったし、どうしても伝えなくちゃいけないことにはか

り気をとられていた。

「知らないよ。ていうか、どんな顔してたとしても、それがあんたに関係あるわけ、アーディル？」

「あるね」

「ないでしょ、と言外に言ったつもりが、彼には通じなかったようだ。」

「シーラーズのやつはあのまま放っておいても、いつか立ち直るだろうよ」

「そうかな？」

とてもそうは思えない。あの時、マイムナーのことを告げた時の顔。思い出したくもないけど、忘れることもできない。

あれからもう六日たつけど、シーラーズは未だかつてないくらいに、表情がなくなつて、どこか呆然としたままでいる。目に精彩がなく、問答をしても鈍い答えしか返ってこない。

失恋よりも最悪な別れ方をしたのだから、家にこもってもおかしくないのかもしれない。でも、シーラーズは普段と同じように父親の経営するお店に出ている。病人みたいに見えるくせに、それでも仕事をする彼の姿をあたしも見ている。

あんなの、時間が解決するにしたって、かなりの時間がかかるに違いない。

「でもお前はずっと、墓に入るまでその傷を後生大事に抱えていくんだらうな」

「はあ？」

傷って、何。

あたしには何かに傷つくような出来事はなかったはず。それを言うならシーラーズの方がもつと悲惨だ。

あんなシーラーズ、見ていたくないよ。

「なあ、あのマイムナーって女は一体何者なんだ？ よつぽどの豪商の娘か、貴族か王族か？ そうでなきゃシーラーズがあんなに落ちこむ理由が分からねえ」

魔神なのですよアーディルさん、なんて言っても信じてもらえないだろう。

あたしは我知らずため息をついた。

どうしようか。

あたしに、シーラーズを助ける手立てはないものだろうか。

「あ

すっかり忘れていたことがある。思い出して、思わず声をあげていた。

いつの間にか窓にのしかかって、あたしの肘あたりに垂れ下がっている被り物ヒシヤープの先のほつれをいじっていたアーディルが顔を上げて怪訝そうにこちらを見ていた。

「もつすぐお祭りじゃん」

「そつだな」

気のない返事のアーディルは、あたしの被り物をいじるのをやめたようだが、まだあたしが言いたいことが分かっていないらしい。

「それってつまり、お祭りだよな」

「何が言いたい？」

そのまんまの言葉をあたしが口にするものだから、体を起こしたアーディルは眉にしわを寄せた。

「だから、それで少しはシーラーズが元気にならないかと思って」

ああ、なるほど。という風にアーディルは両方の眉を上げた。

もうすぐ、預言者生誕祭が始まる。お祭り当日までに町は準備をはじめ、その準備も祭りのうちという風に町は賑わいを見せる。お菓子屋さんは砂糖で作った人形を作り、赤や青などの布を店頭に飾る。広場には芝居小屋や市場が立ち、ウードが奏でられ余興が行なわれたりする。夜からがお祭りの本番で、砂糖の人形や祭りのために作った特別なお菓子や何やらを買いに来る人で広場はごったがえす。預言者を称える詩が朗読されたりもする。

普段勤勉に働いている者も気持ちゆるめ、皆で楽しく浮かれ騒ぐお祭り。

お祭り気分、シーラーズも少しは気分が上昇するかもしれない。

「どうかねえ」

「別にあんたの意見は聞いてないよ。でも余計な水差さないでね」

あたしが敵国の使者でも睨みつけるような顔をしたからか、それに応えるようにアーディルは好戦的な眼差しをしてみせる。

まるでラクダ競走レースの好敵手ライバルであるみたい、あたしたち二人は睨み合っていた。

しばらくそうやって窓越しに睨めっこをしていたが、ふっとアーデルの方が先に目を逸らした。何かを企むみたいな顔をして、顔にしわを集めるような笑い方をした。

「ま、じゃあ……祭りを楽しみだな」

言外に彼はもっと他に楽しみがあるとか、含みのある言い方をしていたけど、あたしにはそれが何なのか推し量ることも出来なかった。

それだけ言うと、アーデルはあたしに背を向けて去って行ってしまったからだ。

何とはなしに、釈然としない気持ちでいっぱいになったけど、ちよっかいをかけてくるやつがこの場を去ったのだからひとまずはよしとしよう。

すっかり慣れてしまった、マイムナーのいない感覚に、一人になったことで彼女の不在を殊更強く感じていた。

アーデルの姿が見えなくなってあたしが一人になっても、誰も出てこない。

天上から声が聞こえるなんてことはない。

何も無いところから突然美女が現われ出ることもない。

シーラーズはあたしなんかよりずっとこの喪失感を味わっているんだろうに、あたしはどうしてもマイムナーの突然の訪問を期待してしまうのをやめられなかった。

誰も出てこない壁を見ながら、あたしは唇を噛んだ。

13・欠落感2

お祭りを一緒に回ろうかと思って、あたしはそれを伝えにシーラーズの働く店に行った。

今日も日のよく照った晴れの日。空の青はまぶしくて、祭りが近いせいか少し町の通りは浮き立っているように見えた。

シーラーズは彼の父親であるサイドさんのお店で働いている。金物屋であり、主に水差しや盥たらいなどの台所用品などを扱っている。まだサイドさんは現役バリバリの元気なおじさんなので経営者としてしっかり働いているが、当然シーラーズに店を継がせるつもりがあるので、後継者である息子に店を手伝わせている。今の状況から考えると、サイドさんよりもシーラーズの方がよっぽど若者らしくない。生气に欠けている。

「シーラーズ」

あたしは、お出かけしやすいからとこの間のようにまた男ものの服を着て家を出た。シーラーズが文句たらたらだった男装だったけど、今日はお咎めなし。なにしろ周りに気を使えないくらいのシヨックを受けているのだ。

「……カマラ」

病に伏す病人のように、ずっと喉で言葉を発する行為をしてこなかった人間みたいな声。

あたしが声をかけるまで、存在にも気がつかなかったらしい。それどころか、名前を呼ばれてもしばらくはあたしの認識が出来なかったように、返事がひどく遅かった。

思わずもれそうになるため息を、あたしはぐつとこらえた。

金物屋の息子は何も言わないけど、あたしは近くにあつた小さい机の前にある椅子に座つた。シーラーズの近くに。

「もうすぐお祭りだね」

元気？　なんて聞けないから、あたしは単刀直入に本題に入ることにした。だって、元気じゃないのは目に見えて分かりきってるし、「うん」なんて見え透いた嘘を言うシーラーズの顔がすぐに想像できるから、それを見たくなんかないもの。

あたしの言葉は仲が良いもの同士なら「そうだね、祭りだね」「一緒に行く？」という会話を想定するには難しくない一言だったにも関わらず、シーラーズは無反応だった。というより、あたしがしゃべっているのも知らないんじゃないかというくらい、上の空。

「楽しみだなあ、あたしは今年ちゃんと出ようかなあと思って、また男装で」

シーラーズが気に入っていない、あたしの男の格好の話をしても返事はなかった。

苦悩する人のように眉間いっぱいにしわを寄せ、影を作っているわけではない。表情はむしろないように見えて一見落ち込んでるようには思えないかもしれないけど、シーラーズのいつも柔和な笑みに近いそれが見当たらない。突然崖に突き落とされたみたい、呆けたような表情に近い。半分伏せられたような瞼が力なく、まばたきさえしなくて、その奥の瞳には目の前のものなんて何一つ映っていないのだ。

抜け殻みたいなシーラーズ。

見ているこっちの方がため息をつきそうだけれど、彼はそうしな

い。
悲しむことも忘れてしまったみたいに、ただそこにぼんやりと立っている。

「ていうかさ、今日もまたアーデルが来たんだよね。なんだろうねあいつ」

「そう…」

「ていうか何かさ、あのー…ほら、あれが……………」

あたしは、禁句があるのを前提にした世間話に慣れていない。今のシーラーズにまともに返事をしてもらえそうな話題なんて思いつかない。

「何か、えっと…」

口にしたらいいことなんて、ちっとも思いつかない。まったく何も、だ。

よくよく考えてみれば、あたしたち二人の話題なんてたくさんあるだろう。かつての遊び仲間、最近交流の復活した年の近い相手だ。共通の話題なんていくらでもある。

それでも、マイムナーのことを口にしてはいけないという思いがなくても、あたしはどうしてか、会話を続けるという能力を失ってしまったのだ。

返事のないシーラーズのように、口を閉じてしまう。

「シーラーズ…」

思わずもらした声は小さく、彼には届かないかと思ったのに意外

にも緩慢な動きで彼はこちらを向いた。それから、長い沈黙が訪れる。

声をかけておいて、何も言わないあたし。

何を言おうとしたのかとも、問わないシーラーズ。

……ああもう、苛々する。

思いはもやもやとしたものから徐々に腹立ちに近いものになりつつあった。

最初は死にかけてる病人みたいなシーラーズを見てると不安で、何かしてやれることはないかと思わされていたのだけれど、今では、その薄ら青い顔をひっぱたきたくなくなってきた。

ああもう何か、腹が立つ。

何が腹立つって、あたしがシーラーズに振り回されているみたいなのが嫌なのだ。

別に、そんなに日常に支障をきたすほどのポケ幼なじみを気にしているわけじゃないけど、あたしが、このあたしがこうまでして心配してやってるというのに、何なのこの反応は！ いえ、反応はないに近しいのだけど、対応が苛々するっ。

どんどんと、苛立ちが体の外にあらわれてくるようになった。あたしの指はまるでリズムを刻むかのように小刻みにとんとんと机を叩く。神経質な大人が会議をしている時のように。

「すいませーん、これ買いたいですけど」

何を言ってやったらいいだろうとあたしが机を叩きながら眉を寄せていると、お客さんが声をかけてきた。お店なのだから当たり前だ、お客さんは来るだろうと分かっているのに、今はあたしの不快感を増すだけの声だった。

「すいませーん」

もう一度、お客さんが怪訝そうな声を上げる。少しだけ店の奥に居るためにこちらをのぞくお客さんは早く会計を済ませたいというような顔をしている。

二度の催促で、店を任されているシーラーズはふらりと店先に向かおうとした。条件反射みたいにして動く、幽霊みたいなこの男。

ちよつと、待て。

「シーラーズ！！」

気がつくとも腰を上げて、あたしは大声をあげていた。

ほとんどシーラーズの胸倉をつかむかのように捕まえて、こちらを向かせる。

「祭りの夜、大人形の前に集合ね」

シーラーズは今度こそぽかんと口を開けてあたしを見下ろして、いつそさつきまでの顔より血の気が通っているように見えた。まるであたしが異国の言葉をしゃべっているとも思っているような顔で、シーラーズは小さく眉を寄せた。

「カマラ………？」

「決定事項………いえ、これは命令だから」

悪ガキのあたしが復活して、ダンッ、と強く手を机に打ち付けることで強調する。凶悪な人間に見えるような顔を作って、あたしはシーラーズを睨んだ。

「遅れんなよ」

強くはないが軽くというにはあまりに衝撃を与えすぎた一撃をシーラーズの胸に与え、あたしは拳を下ろして店を出た。

金物屋の息子よりもっとあっけに取られた顔をしたお客さんを通り過ぎて、あたしは足早に家路についた。

正直あの魂の抜けたような男をどうにかする手立てなんて、一つも思いついていなかった。

でも、あんなボケをもう一秒たりとも見ていたくない気持ちでいっぱいになっていた。

何とかしてやる。

ただそれだけの思いであたしはバザールを進んでいた。気の弱そうな男やおじいさんがあたしを避けていくのが視界に入った。

何とかしてやる。

14・祭りの夜1

預言者生誕祭当日、あたしは忙しかった。夜の出店のために父さんの友人が出すパンの屋台を、父さんが手伝うことになって、あたしの家でもサポートのためにあれこれと雑事がたくさん与えられたのだ。

そう、忙しかった。父さんの友人はあたしのうちの家財道具や食材をまるごともらっていこうとするかのように、出店にこれこれ足りない、それが足りないと言われし召し使いを寄こして、時間がないからとあたしのうちのものをいろいろと借りていった。

いいんだけれどね、とにかく、家のことは一切ではないけどほとんど任されているあたしは、手伝いに来てくれた叔母と朝から家中を走り回っていた。あたしたち女は家の中ではたばたとしていたけど、父さんやその友人も外でたくさん慌てふためいているのだらう。

そんなこんなで、あたしはすっかりシーラーズをどうにかするという件を頭から追い出してしまっていた。

夕方になって一息つけた頃、あたしはふとそのことを思い出してやばいと感じた。

祭りの今日までに考えていたことは少しはあったが、そのどれもが非建設的で荒唐無稽だったので、また新たな妙案をひねり出さねばならないなあと思いついていた。

仕方がないから、少しは事情を知るアーデルにも考えてもらおうと思っていたのに、祭り当日まで会えないでいた。何も伝えていないけれど、アーデルも祭りには来るだろう。会えたら話してみようかな。

ということ、ノープランで祭りの夜に来たのである！

祭りの夜のざわめきは、普段と違っていて、どこか落ち着かない人が多いからというのではなく、また皆が浮かれ騒いでいるからという理由も違う。

何か、事件でも起きそうな気がする奇妙な胸騒ぎと、夜更かしを許されたゆえの高揚感。本当は女子供が夜更けまで祭りに出歩くのはほとんど許されていないけれど、今日のあたしは男の子なのだから構いやしない。

藍色の空がいつもより明るく見えるのは気のせいというものだろう。それにまだ、夜の礼拝を済ませたばかりだから日がとつぷりと暮れた夜の空になるのにはまだ時間がかかる。

寒くなるのはまだまだこれからだけど、暗くなる一方の空と対立するように明かりがつけられた地上の人間たちは、祭り本番と意気込むように騒ぎ立てる。

あたしの気持ちも煽られるようにときどきとしてくるのだけれど、男装で祭り参加ははじめてで、知った顔を見つけられないでそわそ

わしているのを隠すために指先を意味もなくいじりながら、拳動不審に歩いていった。

ちなみに、父さんにこの格好を見られては困るので、ターバンを目深にかぶってうつむきながらの歩行だったから、余計に怪しい感じになっていいるだろう。

今日の危険は父さんとの遭遇だ。それさえ避ければ楽しい祭りになるだろう。

まあたぶん、父さんは出店の対応が忙しくて近くを通らなければ顔を合わせることもないだろうから、気をつけていれば大丈夫なはず。

それにしても、男装をしているせいか誰にも声をかけられない。当たり前だろう、あたしが最近ずっと親しくしているのはほとんどが女性相手で、見知った顔の男性なんて家族以外でシーラーズとアーデルしかいないのだ。家族以外の男は婚約者でもなければむやみやたらに会うことも少ない。父さんの知り合いならよくうちに顔を出すけど、あたしの顔の作りなんてよく知らないだろう。家族以外に会う時には被り物ヒジャーブをしていなきゃならないし、あたしはすぐに別の部屋に引つ込むのだから。

声をかけられないというのは気軽でもあったが、なんととはなしに自分だけ異国の人間になったみたいなお疎外感に近いものも感じる。

シーラーズいないかな。どうしてやろう、あの男。

雑踏に、探しものをしながら歩く。あたしにはやっと考える時間が与えられた。

あたりに視線を投げながら、祭りの町を歩く。

肩を組みながら歩くあたしより少し年上くらいの男子たちが、連れ立って笑いながら砂糖で作られた人形を見ている。砂糖人形は、好きな人にあげるとよろこばれるような代物だから、もしかしたら

意中の人にあげるのかもしれない。

小さな子どもが、兄弟だろうか年上の子にお菓子を買ってとせがんでいる。なんだかほほ笑ましくて、目じりが下がる。

お芝居がはじまったのだろうか、人垣の向こうの方がいつそう騒がしくなった。

いつもの、お祭り。

地上の明かりのせいで、夜空はいつもよりも明るく見えた。

気がつけば、あたしはえもいわれぬ不安を覚えていた。

幼い頃、父さんと一緒に出かけた見知らぬ町で、迷子になった時みたいなそわそわした気持ち。何かにせかされているような、強迫観念じみたものが背中にはりついていてる。

今のあたしの状態が、知り合いもなく一人でいる迷子に近い状態だからというわけではない。

シーラーズをどうにかしてやろうと思うにつれ、何だか胸のあたりがくすぶる燃えさしみたいにもやもやを吐き出す。

先日会ったばかりの後は、苛立ちと純然たる決意だけがあたしを占めていたものだけけれど、今では情熱が冷めてでもしたかのように、それらはすっかり消えてなくなっていた。

彼を前にしたらまた復活するかもしれないというのは、否めないけど。

もしかしたら、あたしにはもうどうしようも出来ないんじゃないか、と思いはじめていたのかもしれない。

無理なことをしようとしている。

砂漠で砂金を探すような、ラクダを針の穴に通すような、不可能なことに挑んでいるのではないか。

失恋は誰だつてする。でも、相手は魔神だ。二度目のアタックをするのに、シーラーズは一度目の告白アタックすらさせてもらえなかったのだが、二の足を踏む理由になつてしまう。

だからだろうか、あたしはシーラーズになんとかしてやるっ！っていつつもりでいたけど、どうにも出来ないような気がして、しょげているのだ。

だって、相手は魔神なのだ。人間の理屈が通じる相手じゃない。だって。

ため息は好きじゃない。だって、あたしは今落ち込んでますよ、悩んでますよ、なんて周りに言いふらしているのと変わらない。それに、ため息ひとつで元氣も抜け出ていくような気がする。

だから、ため息はしたくない。

そういえばマイムナーが来てからも一度かそこら、ため息をついたっけ。それで、マイムナーに「ため息ね」って言われて……。

ああ、そっか。

あたしは、マイムナーがいなくなったのに、シーラーズ以上に悲しんでいないと思つていたけれど、ちゃんとさびしかった。

恋する男を比較に使つたから間違いなのだ。

マイムナーは、あたしにとって、はじめてのちゃんとした女友達だった。本当によく気が合うわけではなかったけれど、何でもかんでも話せる相手じゃなかったけど、それでもマイムナーとおしゃべりの時間は、他のどの女友達とするより楽しかった。

あたしには、何人かの年の近い友人がいるけれど、みんな、あたしよりずつともつと女の子らしく振舞っているし、興味があるものだって、お洒落とかお化粧とかどここの息子が格好いいだとか、そういうあたしの興味とはちょっと違うものばかり目がいってる。

彼女たちと一緒に過ごすのは、楽しくもあれどときどきすごく疲れるのだ。あたしは小さい頃に悪ガキだったせいか、どちらかという
と男の子の興味を持つようなことにはかり目がいつてる。どこかへ
旅をしたいとか、剣をならつてみたいとか、見た事のない景色が見
たいとか、そういうことばかり。他にも女の子らしいことが苦手で、
いつそ男になれたらと思うこともある。

そんなあたしをマイムナーはただ受け入れるんじゃなくって、否
定するのでもなくて、ちゃんと聞いてくれた。ばかみたいって笑っ
たりしない。マイムナーは外見だけじゃない、内側からきれいな魔
神なんだ。

あたしは、分からなくなつた。

大切な人が二人いて、どちらとも仲良くしたい。それからもう一
人は行方不明だから探したい。でも、魔神が相手。それから、あた
しは……………。

ぎゅうぎゅうと、体の真ん中にあるあたしを支えるなにかを引き
絞るかのような感覚がおとずれた。

苦しくはないのに、喉がひきつれる。

何だか今、あたし、すごく

「カマラ？」

重たいままの体だけど、びくついたので自分でも分かった。

この声は、シーラーズ。

「どうしたの、何だか元気がないみたい」

最近のぼんやりした様子は未だぬぐえないものの、シーラーズは

たしかにあたしを心配していた。
他人を心配できるくらいには、回復したのかもしれない。

「なんでもない。元気元気」

首を振ってやっと、ほとんど涙が出かけていたのが分かる。あたし、一体何に涙しようとしていたんだろう？

わけがわからず、一度うつむいて気持ちを落ち着かせることにした。

大丈夫、よし。

瞼を閉じて、自分に言い聞かせるとふしぎなことにすべてが上手くいくような気がしてきた。

目を開けたら、もういつものあたし。普段通りに笑って返す。

「シーラーズ、何か買った？」

否定の仕草をとると、シーラーズは消え入りそうな横顔を見せた。一瞬、正気になったかと思えばそんなことはなかったことにするかのよう、また傷心の抜け殻に戻ってしまった。

シーラーズ、あんた一生そうやってるつもりなの？

「アーディルだ」

あたしの心の問いかけなんて知らないで、シーラーズは小さくつぶやいた。目の前にあるものの名前を言ってみるといわれた子供みたいに、淡々とした声。全然、なおってない。

確かにアーディルは人混みをかきわけてこちらに来ようとしている。別段ありがたくもないが、今は誰であれあたしとシーラーズを

二人きりにしないのなら大歓迎だった。

「よお、何してんだ」

アーデイルは既に祭りを堪能しているようで、お菓子やら何やらを片手に姿を見せる。空気の読めない男ではないらしく、最初こそはにやにやとしていたアーデイルだが、あたしたち二人の間に流れるしぼんだ空気に眉を上げてみせた。

15・祭りの夜2

「何しけた面してんだ、早く来いよ」

今は誰でもいいと思ったけど、アーデイルは思っていたよりこの状況にぴったりなのかもしれない。無駄に騒いで盛り上げるでもなく、訳知り顔で雰囲気をもっとしんみりさせるわけでもない。

このまま彼についていくのはしゃくだけど、他に道を思いつかなくてあたしは足を動かした。

つつ立つたままのシーラーズの腕をとると、あたしたちは歩き出した。

さつき感じたさびしさと、シーラーズの元気のなさで、祭りの真っ只中にいるというのにあたしはむなしさのようなものを抱いていた。町がにぎやかな分、かえってあたしの内側は白けてくる。

「砂糖の人形買ってやろうか、カメラ」

いつの間にかシーラーズの手はあたしから離れていたけれど、彼はまだついてきているみたいだから、よしとしよう。ついでにアーデイルの軽口は適当に流しておこう。

「いいええ、引く手あまたのアーデイルさんにはわたくしなんかよりも良い人がいらっしやるでしょうから結構ですわ」

預言者生誕祭で砂糖の人形を贈るといのは、ただ単に贈り物をするというだけではなく、たとえば恋人になってほしい人に宛ててとか、もう既に恋人である相手に贈るとか、そういう色恋に向かう意味合いも持つ。もちろん、大切な人 家族とか友人とかに贈る

事だって多々ある。アーデイルはいつものようにあたしをからかっているだけなのだろう。人形を贈ってくれる人もいないだろうからお情けでくれてやるよ的なノリで。まあそこまですはいかなくともアーデイルに贈り物なんてされてもい로운な意味で困るので、断るに限る。

「ふむ、今渡してるのを見たら誤解されかねんなあ」

と、アーデイルはあたしの格好を頭の方からつま先まで眺め回して、意味深に笑った。というか、むかつく顔になった。

あたしが今男装をしているのを、一瞬でも忘れていたから嫌がらせ発言をしようっていうのね。

「そうだね、出来の悪い兄がいるって思われるのも嫌だし」

あえてあたしは、アーデイルが意図した事に気づいてない風に装った。家族間で人形を贈る事だってあるわけなんだし、嫌な冗談だけれどあたしがアーデイルの弟で兄に人形をもらった、みたいな絵面が出来る可能性だってあるのだと教えてやる。

「はっはっは、口の悪い弟が出来た覚えはないが 年上を尊重するって事を教えてやらんといけないようだな」

「たとえば敬うに値しない相手がいたらどうします?」

「人の良い面ばかりを見る事を覚えてもらうのはどうかな」

「ふっふっふ、時には人を疑う事も大事ですよ」

傍目には微笑んで他愛のない会話をしているように見えただろう

が、あたしはアーデイルの背後に何か居る、みたいなオーラを感じていた。そうたとえば蛇とかコブラとかそんな感じの牙を研いだ生き物。対するあたしの背後にも、何か居てくれたらいいと思うのだが。まあ、とにかく牙をむき出しにした生き物をあたし自身はイメージしていた。

そしてこの間、某失恋傷心真つ最中の彼は放置されっぱなし。それにすら構わない様子だけれど、でもまだシーラーズはあたしたちの近くに居る。

ああ、近くににいるのに何も出来ない事つてあるんだな。

それでも何かしたくてこの祭りに来たんじゃないの、カマラ。

ああもう、苛々する。

悶々としてきたあたしに気づいたのか、アーデイルが珍しく真剣な顔をしてこちらを見ていた。それに気づいた頃には、彼はあたしに何かを言おうとして口を開いていたのだが、彼でもシーラーズでもない声に妨害される。

「よおつ、アーデイル！ シーラーズもいるじゃねえか」

「ははは！ おいアーデイル聞けよ、ウマルのやつがさ」

「あれ、こいつ誰だ？」

六人くらいの若い男たちがどつとあたしたちの方へ押し寄せた。年も同じくらいだし、どうやらアーデイルやシーラーズの知り合いのようだ。かなり親しそうだというのに、アーデイルは彼らの顔を見ると一気に顔をしかめてみせた。実は仲が悪いのかな？ なんてあたしの余計な心配も他所に、アーデイルはあたしを紹介してくれ

た。

「あー、こいつはハサン。シーラーズの遠縁だ」

何故かそういう事になった。シーラーズを構おうとしていた男子は、彼の反応がないので諦めてアーデルたちのところへ戻っていたが、シーラーズの名前が出てきた事でまた彼に視線を戻す。

どうしてアーデルはシーラーズの遠縁などと、嘘をついたのだろうか？ しかも、いかにも真実を語っているような顔つきで。なんだか嘘をつきなれているといった様子。さすがアーデル。

でも、確かにあたしは女の子のくせして男物の服を着て、夜遅くにまで出歩いてはいるが、そこまで身分を隠すべき人間ではないのに。うっかりアーデル知人たちの中にカマラを知っている人物がいたらどうしよう？ 怪しまれるんじゃないのかな！

段々、今日のこの男装生活が不安になってきた。シーラーズにも上手く伝えられないし、若干お呼びではない男性陣も増えるし。ちらとアーデルを窺うと、彼は意外にも苦笑のようなものを浮かべてひとつ眉を持ち上げた。アーデルにとってもこの状況は不本意なものなのかな……？

「なんかひ弱そうだな」

「シーラーズの親類か。聞いた事ないけど」

「あ、あははは……どうぞよろしく」

あたしはとりあえず怪しまれない程度に返事をしておく。シーラーズはというと、顔をこちらには向けないでここではないどこかを見ている。どうせ、シーラーズが見ているものなんて分かりきってるけれど。

「まあいいじゃん、祭りなんだから楽しくいこうぜ！」

「じゃあさ、この間の話聞く？」

「それよりシーラーズの失敗談聞けよ、ハサン。面白いぜ」

どんちゃん騒ぎの要となるのは、彼らのような浮かれた若者たちなのだろう。今回は、気落ちするシーラーズにも少しは気分を持ち上げてもらおうとしてこの場に來たのだが、今はどうしてかテンションの高い彼らがうっとおしい。そっとしておいてほしいわけではないが、なんとなくの温度差を感じる。一番の温度差は、シーラーズとの間に感じているものが大きいだけけれど。

「シーラーズの飲酒騒ぎ！ あれはウケたなあ」

「あいつ酒弱すぎだよな。あ、分かっているとと思うけどこれオフレコ
な」

どうやら、彼らは彼らの間で行なわれた飲酒について話をしようというらしい。

飲酒だって？ あたしは、いつかシーラーズが行なった説教について思いをはせる。

あれはつまり　そういう事か。

若者というものは禁じられたものに自ら進んでいくもので、禁じられた飲酒をしてみたいと実行してしまう生き物なのだ。あたしだって、アラキを飲みたいと願ったりもした。それを止めたのが、真面目一直線のシーラーズ。そう、シーラーズ。彼が過去に飲酒をして失敗したことがあるからこそ、あたしの失態を予想できて、猛反対した、というわけなのか！

呆れるような、怒りたいような、なんとも未消化な気持ちでシーラーズを見ると、今度はこちらに顔の正面を向けていた。ちょうどいい、とあたしは顔を不満いっぱいにしてみる。するとどうだろう、彼の失恋以来はじめてくらいの現象が見られた。シーラーズと目が合ったのだ。

「シーラーズ」

「でよ、あいつは即効で眠りこんじまったからおれらは思いついたんだ、どのくらい記憶がなくなるかなって」

「そうそうそれで、アリーの妹に頼んで」

あたしの声はかき消された。一瞬、目が合ったと思ったシーラーズもふいに顔を逸らしてしまった。
なんで。

いろいろと、タイミングが悪すぎた。

「なあお前ら、そろそろ」

「待てよアーディル、こっからが面白いとこなんじゃねえか」

ふいに、シーラーズが瞠目したのをあたしは目にした。何、なんて思う暇もなく降ってくる影に体を動かしていた。いえ、動く隙間なんてなかった。あたしは若者たちに囲まれて、身動きがとれそうになかったのだから。

祭りは巨大な人形を御輿のように担いで動かす事で最高潮を向かえる。それが、運ぶ人間に問題があったのか居た場所が悪かったのか、あたしたちの立つ場所に突撃してきたのだ！

「どけっ、お前ら危ねえ　！」

気がつくのが遅かったもののせいで、あたしや周りの男子たち、その他もたついていた人たちは、巨大な人形が傾くのを目にして退散出来ないでいた。つまるところが、傾いだでかい人形につぶされそうになる人間が十数人。あたしはそこに巻き込まれようとしていた。

あの大人形は鉛で出来ているわけではないがその身の丈に似合ったそれなりの体重を持っているはずだ。場は騒然となった。

あたしはというと叫ぶ暇もなく逃げる場所もなくただ大人形の訪れを待つしかなかった。

いえ、もちろん受け止めたくはないのだけれど！

「ひゃあっ」

鈍い音がして、大人形がぶっ倒れた。

16・決意

人形に押しつぶされた人間は声を上げる事が出来なかったが、それを見守っていた人たちは黙っているなんて出来なかったみたい。でも、あたしたち当事者と傍観者の間には温度差がある。ここでも温度差、でもきつとあたしとシーラーズとの間にある差にはかなわないに違いない。

「カマラ……？」

あたしは目を疑った。どうしたの眼球、こんなところで何しているの、あたしから引き離されて遠くに行ったの？ それを脳みそが受け取ってるけど、あたしは眼球とは違う場所にいるのね。ってそんなばかな。

大人形が倒れたのに、何も降ってこないからおかしいと思ったんだ。

でもまさか、最近の状態だと人間よりも人形らしい、シーラーズがこんな間近に迫ってくる、そんな動きを見せるとは思ってもみなかった！

顔を上げた彼は、それでもあたしが手をちよつと伸ばせば触れられるくらいの距離にいる。

あたしは、シーラーズにこの身をかはわれていた。シーラーズはあたしにかぶさるようにして、降り落ちる木っ端やなにやらの盾になっっていた。

「シーラーズ？」

「大丈夫？ カマラ」

シーラーズの瞳は病人の快癒を願うみたいに細められていた。あたしのこと、心配でもしているっていうの？

まさか、そんな。なんだか彼はまるで、普通の人間みたいに見える。

ていうか、違う、顔が近い！

シーラーズはうつかり顔だけは真つ当に見えるので落ち込んでいようとも怒ってはいようとも、整った顔が歪むようなことはなくって、それはつまり今もそうで、つまり……。黒曜石の瞳がきれいとか、ああああ、そんなんじゃないっ！

「だいじょうぶっ！ だからどいて今すぐに！ 猛烈に早く！」

腕を伸ばされ体を押し上げられたシーラーズは、あたしが急に言葉を発したのが不思議だともいうようにきょとんとして体を起こした。

うっ、くそ、顔が熱い。まさか赤くなってるんでしょうね、あたしの顔。うるさい心臓くらいなら周囲には知られないはずだけど、でも顔はまずい。どうしよう、シーラーズの顔がよく見られない。それに、あいつはまさか今さっきのショックで正気に戻ったみたいなの顔をしていなかった？ 確認したいけど、なぜだかあたしはそれを実行にうつせなくて、体を起こしも出来ないでいた。

地面に転がったままの助けるようにシーラーズが手を伸ばしてくるから、あたしは素直にそれをとれないでいた。だから、自分の力だけで体を起こし、立ち上がる。ちよつと足元がおぼつかなかったけれど、それでも特に体に不調は見られなかった。シーラーズがかばってくれたから、だろうな。

うわ、また何故かはずかしくなってきた。

顔の熱を発散させるかのようになり、あたしは左右に首を回した。

辺りは砕けた大人形によって散らかってしまっている。手の部分の一部とか、もはやどの部分なのか分からないものとか、とにかく汚い部屋のような広場になっていた。

人々は、そろそろにわかを訪れたショックから立ち直っていても怪我人がいないか確認してばらけた人形の後片付けをはじめようとしていた。

「どうやら悲惨な結果にはなっていないようで、軽傷者がいくらかいるくらいだった。」

「なんだかちよつとすごいことになっちゃったね、シーラーズ……シーラーズ？」

気づくとシーラーズはあたしの横にはいなかった。どこに、と首をめぐらせれば彼は少し離れた場所にいた。あたしが見た時にはもう立ち止まっていたが、視線をいくらか動かすとシーラーズのしようとしていたことが分かってしまった。

この辺りでは珍しい髪の色を明るい女性を見つけていたのだ。マイムナーかと思って追いかけたら、他人だった。という事。

なんだ。まだだめなのか。

「ミイラ取りがミイラになってんじゃねえのか」

顔を向けなくとも分かる、アーデイルの声だ。そういえばアーデイルも人形の下に居たはずだけれど大丈夫なのかな、なんて別に心配しなくてもいいか。

あーあ。アーデイルなんかにかづけられるなんて。

ため息をつきたい気分だったけど、意気込みまでも抜け出ていきそうであたしは我慢する。

そうだ。あたしまで気落ちしている場合じゃない。あんな馬鹿に

引きずられている場合じゃないのだ。

片付けに向かう民衆を後目に、あたしは拳を握って一人の男の背中に向かって歩き出す。

「シーラーズ！」

振り返った青年の瞳にはまだまだ覇気がない。どこに行ったの、彼の魂は。

それを探すためにも、あたしは、背中を蹴り飛ばさなければならぬ。

よし。

もう一度、手を強く握りしめる。

「……なあに、カメラ」

「何ぼけつとしてんの？ 早く支度して。行くよ、マイムナー探しに」

自分の口が誰かによって動かされているような錯覚もあった。無意識のうちに口をつけていた言葉、それでもあたしの本心に一番近いのは、それだった。

そう、突拍子もないけれど、ずっと可能性の一つとしては考えていたこと。無理と決め付けて、忘れようとしていたこと。

「……へ？」

「手がかりはダマスカスしかないし、今更もうきつと、追いつくなんて出来ないかもしれないけど、もたもたしているうちに手がかりはもつとなくなっちゃう」

これまでにシーラーズの間抜け顔ならたくさん見てきたけど、今回のこれは一番おかしいわね。

でも、傷心状態では見られる事が出来なかった、一番人間らしい顔だった。まるでいじめっ子のあたしに無理難題をおしつけられてびっくりしている子供の頃みたいに。ちよつとだけ、目元がじんときた。

「さいわい、あたしたちはマイムナーにお礼をもらっているから、それを旅費に使えるね」

続けるあたしの言葉に、シーラーズはやつと脳みそに情報を行き渡らせたようだ。戸惑うような顔も、久しぶり。

「ちよ、ちよつと待ってカマラ。一体何の事を言っているの？」

「だから、行くの。マイムナー探しに！」

あたしの決意を笑うような、豪快というか高らかというかあっけらかな笑い声が響く。いわずもがなのアーディルさんだ。ちよつとイラつくけど、今はまあ、瑣末な事。

「ははっ、お前、本気で面白いなカマラ！」

あそこまで破顔するアーディルというのは、珍しいというか奇妙で微妙に見たくないようなものだったが、嫌味なものではなさそうだった。そんな反応はどうでもいいというか、そこまでの変化はシーラーズに求めているのだけれど。

「しるれこ」

「いやいや、面白いつて。ああ、お前らといると退屈しないな」

にやり、なんて笑うから　あたしは不穏な予感に顔をしかめた。
ま、まさか。

「それ、おれも連れてけよ」

いやいや、それはシーラーズから聞きたい台詞でありまして！
なんだかもう、アーデルは放っておいてもついてきそう（とい
うか尾行^{ついで}てきそう）だから無視する事にしよう。

問題は、シーラーズだ。

「シーラーズ、あんたは会いたくないの？　マイムナーに」

あたしは自分の表情が最上級の真剣味を帯びたものになっている
事を祈ってシーラーズを見つめた。

出来れば、強制はしたくない。

でも、簡単には諦めてほしくない。

あたしだって、マイムナーに会いたい。でも、あたしなんかより
も、もつときつとシーラーズの方がマイムナーに会いたいはず。だ
から、あたしは手を差し伸べるのだ。

「行くの、行かないの、今決めて」

シーラーズの顔は呆けたようなものとも、傷心時代の魂を失った
彫刻みたいなものとも、違っていた。意思を秘めているけれど、生
まれたばかりで感情などの名前も知らないみたいな顔。

あたしの言っていることが、分かっているのだろうか。

この手を取って、シーラーズ。

本当は、あたしの方こそ誰かの手を取りたかった。ただ、誰もいないから、あたしがその人になるしかない。

ねえシーラーズ、あの人に会いたくない？

彼は、小さく眉を目に近づけた。まるで悩んでいるみたいに。何か苦しんでいるみたいに。まるで 何かにすがろうとするみたいに。

思っているのだろう、マイムナーを。

そんなあなたも見たくはないけれど、でも、さっきまでみたいな顔をしているくらいなら、あたしを睨んでもいいから、この手を取って。

「カマラ……」

あたしの名前を呼んでおいて、マイムナーを想っているような男。ああ、こんな男放っておけばよかった。ちょっとだけよぎったけれど、もう後には引けない。

伸ばされたのは、シーラーズの遅い腕。あたしなんかよりも長くて太い男性の手。子供の頃はあたしと一緒にのちっちゃくて骨みたいな腕をしていたのに。なんだか、今更時間の流れを感じた。

手に重みがやってきて、あたしはどんな顔をしたらいいのか分からずに、シーラーズを見上げていた。黒く輝く瞳は、遠くを見ているのに、あたしを見ていた。

「……行こう、マイムナーを探しに」

こんなにもうれしくて、こんなにも悲しくて、こんなにも泣きたくて、こんなにも笑いたくなった日は、この日以外になかった。

17・旅路

旅慣れた男アーデイルが、ほとんど半分近くの旅支度をそろえてくれた。

あたしたちは、夜明けを待ってバグダッドの町を出た。

かなり唐突だと思う。

何しろ、祭りの次の日にはまだ祭りの名残でにぎわうというのに、あたしたち三人は町の喧騒から逃げるように出て行くのだから。

ここまで急いだのには理由がある。一つは、あたしとシーラーズの決意が揺らがないうちに出立しなければならぬからだ。もう一つは、男だけの旅ならともかく、あたしという女がついてくるので親にばれてしまうわけにはいかないということところだ。

正直、後々になって考えてみれば祭りの熱に突き動かされての行動とも、言いきれないわけではない。でも、確かに必要だと感じたからあたしたちは旅に出たのだ。

その間、シーラーズが自覚しきった自分の思いを口にしないのであれば、もっと楽しい旅になっていただろうという問題点はあるものの、あたしたちは旅を続けた。

空は無慈悲に暑く、高く、青白かった。行けども広がる砂漠の地平線、風紋が今ではうらめしいくらいに見飽きてしまった。

体力にはそう自信はないが、根性ならあたしは自信があった。砂漠の旅はラクダであるものだし、自分の足で移動するのではないけれど、根性がなければやっていけない。

地上を焦がそうとするかのごとく太陽が照りつける中、あたしはよくがんばったと思う。不平不満はもらしまくったし、男たちに迷惑をかけまくった。でも、一番身にこたえたのはシーラーズのものけ的な不満を聞かされる事だったりした。

「マイムナーの顔を見られないだけで寿命が一年縮みそうだ」

とか、

「魔神だからなんてためらうんじゃない」

とか、

「マイムナー」

っていう艶っぽい吐息と共に聞かされるんだかんだというあれやこれや！

ちなみに、これが物語りの冒頭に置いてあった話の時期だったりする。まあ、もう結構前の回になるし、そういうこれは物語です発

言はやめといた方がいいんだろうけど、念のため。

「あああ、アーディル、あいつふんじばっていいかな？」

「お前だけ帰れば」

アーディルは全てを見透かす顔で笑った。まるであたしが邪魔者だともいうような、姫を助けに行く王子の、助け手にもなれないと言いたげな表情だった。あたしは腹が立ったので足を踏んであげることにした。まったく、人がつつこまれたくないことをつつこむ男だ。

あたしたちはマイムナーが寄ると言っていたダマスカス目指して旅を続けていたが、明らかにあたしは足手まといになっていた。あの程度急ぐ旅のはずが、町にたどり着く度に休憩をする必要があった。あたしのせいだ。

せめてもの救いは、金銭面はほとんど気を使うことなくやっていける、という事だった。マイムナーの置き土産のおかげで、あたしたちは比較的快適な旅をしていた。それでも、あまり金持ちだと思われて追いはぎに襲われたりぼったくりにあったりしては困るので、身の丈にあったお金の使い方をしていたけれど。

今回の旅で頼りになるのはアーディル一人だった。彼は何度かキヤラバン隊に加わって砂漠を歩き来たことがあるのだ。体力もあるし、実は剣の腕がたつらしいし、何より旅慣れている。不本意ながらあたしは、アーディルのことを頼りにし、何度も助言に従った。だからといって、あたしは今更引き返すつもりはなかった。

「あなたこそ帰れば」

「おれがいないと困るくせに」

つい口をついた軽口も、現実的に受け取ってもらっては困る。とはいえ、そうやって勝ち誇った笑みをされるのではどうにも割に合わないような気がしてしまつのですけどね！

素直に頷くにはあたしは天邪鬼すぎるし、かといって本気にされてしまつては困るので、あたしはアーデイルに言い返せないでいた。

「それよりお前、大丈夫か。ここ数日でやつれたんじゃないか」

「あんたの目こそがやつれたんじゃない？ 眼精疲労よ、それ」

あたしは、自分の体力が砕け散ろうとしているのを相手に知らせるわけにはいかなかった。だって、これ以上足手まといにはなりたくない。旅路を遅らせるわけにもいかないし、何よりあたし自身がこの足を止めるわけにはいかなかった。まあ、実際にあたしを乗せて歩いているのはラクダなんだけれど。ちなみにあたしの乗るラクダの名前はイスカンドル。かの有名な遠征王と同じ名前で、顔立ちはけっこうかわいいと思うけれどいかつい名前を持つ。たまに聞かん坊だけれどいい相棒だパートナーと思ってる。

「どうかな。後悔するぞ、後でアーデイルさまに頼っておけばよかったってな」

「相変わらずあんたってやつは人を逆なでする才能に長けていること」

あたしたちにほほ笑ましくも麗しい会話は終了した。

その夜、あたしたちは竜巻に遭遇してしまうことになる。

気配とか、予兆とか、旅の初心者あたしは感じ取ることなんて微塵も出来なかった。アーディルですら、既に竜巻の接近を許してしまっただけで声を上げたのだ。突発的な砂漠の竜巻は、もう身を低くしてやり過ぎすしかないのだ。

「竜巻だ！ 降りろ、とにかく身を寄せてひとところに居座り続けるんだ」

命令するアーディルにあたしたちは従い、ラクダに足を折らせてから一箇所に身を固めた。

あたしははじめての竜巻にそわそわとして視線をさまよわせた。

来た。あの、ただの柱のような、歪んだ縄のような、奇妙な物体あれが近づくとあたしたちはひとたまりもなくなるのだ。

心臓がばくばくと、いつでも動けるようにフル稼働する。首を伸ばしたあたしに、アーディルが叱責を飛ばす。

「出来るだけ身を低くしろカマラ、あれに飲み込まれて飛び上がらないのならば」

首を縮めて、あたしは小さくなる努力をした。

それにしても、こんな砂漠の真ん中で竜巻が発生するなんて、一体どういう原理なのだろう。

徐々に、風が強くなってきて、あたしたち三人の身を打つ。ターバンの間に隙間を作って、軽い布なんて空に飛ばしてしまっそうに

なる。あたしは必死でそれを押さえた。

「竜巻に飲み込まれたら、空を飛べるのかな」

「何たわけたこと言ってんだ、ぼけ」

そう出来るのであれば、今すぐマイムナーのところへ飛んでいきたい。シーラーズの思いが読める気がした。それ名案、なんて誰が思うのか。この強風の中、立ち上がりでもすればうっかりものすごい速さでダマスカスに着けそうなくらいではないか。あ、やつぱり名案なのかも。でもその頃にはもう人間の体なんてずたばろになっ
てそうだけど。

ああ、もう、この風は尋常じゃない！

目など開けられていられなかった。おそらく砂がなくとも眼球に優しくない強風と、おしよせる恐怖で。

肌が痛いのだ、風などという目に見えないものではなくこれは目に見える害悪のようなもの。目などとても開けられたもんじゃない。それに、息がしづらい。鼻の穴なんて隠すように手で覆っているのに、風なのか砂なのかゴミなのか分からないものがあたしの鼻の中に侵入しようとしてくる！ 苦しい。

何これ。旅ってこんなに大変なものなの？

これまでに感じた体の疲労、長時間ラクダに乗っていると痛くなる体の節々、特にお尻が固くなってしまったようだとか、極度の空腹、焼けるような日差し、それから喉の渇き、気の遠くなるような地平線がもたらす倦怠感に、押し寄せる不安。そんなものは、風よりも力ある強風の中では大した苦労ではないように思われた。

これまで感じなかったこと。怖い。

体がバラバラになりそうだった。何かに掴まっ
ていても引き剥が

されそうになる。風に引き寄せられている感覚があるのに、頭を掴まれていたようなひどく重い頭痛のようなものがのしかかる。飛んでいけそうなくらい軽いあたしの体は、それでも重たくて鉛みたいだった。

「……………！」

「……………？」

誰かが何かを言っているような気がした。

でも、もう暗闇の世界であたしはただ必死にたえる事しか出来なくなっていた。シーラーズあたりが、元気づけようとしているのだろうか。彼は旅に出てから口数もいくら増えたが、時折またあの時みたいに黙り込んで表情をなくす時がある。だからマイムナーの話題でも口を開いていてくれる方がいくらか良かったです。こうして急場に声をかけられるくらいにはなつたとよろこぶべきなのだろう。でも、声なんて届くはずがない。こんな場面で。

「……………！！」

体はひどく重い。なんだかもう、耐え続けるのにも疲れてしまった。肩が重いし、お尻は革になつてしまったみたいだし、関節のどこもおかしなきしみを上げている。

頭はぼんやりとしてきた。どうやら、頭痛があたしを飲み込もうとしているようだ。いっそ、考え事をしなくてすむのならその痛みに身を任せるのもいいのかもしれない。

風が吹いていなくなつて、竜巻をやり過ぎすのではなくなつて、あたしはなんだかもう、目を開けるのが難しい作業になつていた。このまま、眠りにつくのはどうかな……………。

「……マラー！」

「目を……！」

「……起き……」

なんだか気持ち悪かった。胸がむかむかするというか、頭がおかしくなりそうなくらい痛いとか、全身が海に沈める碇のようになってしまったとか、もう考えるのも辛い。

痛い。疲れた。苦しい。

あたしは、また迷惑になっているなんて気づけずに、竜巻が去ったとも分からずに、静かに意識を手放していた。

18・小休止<裏>（前書き）

今回はカメラ視点の一人称じゃなく、三人称です。

本当は一人称だけで貫き通そうか迷った挙句の一言をどうぞ。

18・小休止<裏>

バグダッドとダマスカスの間にある一つの小さな町についた。

シーラーズは腕の中の感覚を確かめるようにして抱きしめ直した。彼にしてみればすごく軽かった。カマラの体は、普段のあの圧倒されるようなエネルギーをどこに隠していたのかと思うようなくらい、小さくて細かった。入れ物がこんなだから、きっと精神力は強くとも辛い長旅には耐えられなかったのだ。シーラーズは端整な顔を歪めた。彼女には無理をさせてしまった。原因を作ったのはシーラーズだ。

そもそもカマラはシーラーズのために旅に出たのだ。何故自分はこんなになるまで彼女を放っておいたのだろうか。

宿の受け付けでアーディルが宿代の交渉をしていたが、なんとか治まりがついたようだ。振り返ると手招きをする。

「おい、部屋確保したぞ」

頷くと、シーラーズはなるべく振動を与えないようにと気遣いながらもカマラを運んだ。

その様子をアーディルは眉を持ち上げて眺めていた。彼にはシーラーズに言っただけの事ではなく、まだ今は時じやないと思いかマラのために用意した部屋へと足を向けた。

彼らの旅の同行者カマラは、続く行軍で疲弊したために熱射病と

過労に倒れてしまった。たまりにたまった疲れが竜巻の到来でカマラの辛抱を打ち砕いたのだ。

カマラ一人のためにとつた部屋の寝台に、シーラーズはまるで姫様にも触れているかのように丁寧に少女を寝かせた。元よりシーラーズの性質は他人に優しくするという不文律を持つ。だが、それにしてもやけに気を配るではないか？ アーデルの注目はそこにあつた。

シーラーズは眉にしわを寄せたまま、意識のない少女を眺めた。自分がそうやって、カマラに心配されていた時期があるのを知らないのだろうとアーデルは決め付けていた。

「……カマラはもう、帰すか」

でなければ、このままこの町にでも居てもらおう。帰り道、拾う。アーデルはそれも悪くないと思っていた。カマラはがんばりすぎたのだ。見ているこっちはばかりが気にしても、本人はまるで自分の体調に気を使わない。見ていて時に苛々するほどだ。だからアーデルは自分の精神安定確保のためにも、もうカマラにはこの旅を続けてほしくなかった。

「いや、カマラの意思を尊重したい。意識が戻ってからもいいはずだよ」

「シーラーズ。お前は一体どうしたいんだ？」

彼らにも、この旅がいかにも無謀なものか分かっていた。考えないようにしていたが、この、マイムナーという女魔神を捜し出す旅はとてもしゃないが、宛てなどない不安定なものだった。アーデル

はもう、あの絶世の美女が魔神であると告げられていた。旅の仲間になるというのに隠し事はなしだと、カマラに吐かせた。最初は呆気にとられたものだが、なるほどと合点がいった。シーラーズのあれほどまでの放心と、カマラの気落ちした様子は、相手が次はいつ会えるとも分らない魔神が相手だったからなのだと。

こうして旅に出たのも、決意がいるものだったろうとは思うのだが、アーディルにしてみればカマラはシーラーズの背中を押しただけでよかったのではないか。恋する男は一人ないしはその男友達だけで旅に出るべきだったのだ。冷静に考えればすぐに分かる事だ。それを、こうして現実をつきつけられるまで気づけない、いや、見ないふりをしてきたのにはアーディルにも責がある。

シーラーズは顔をしかめてまでカマラを連れて行くような人間ではないはずだ。ここまでするには何か理由があつて、それをはつきりと口にしてもらわなければ困る。

「……強要はしない。でも、カマラには………笑わないでくれるかな、僕の指針になってほしいんだ」

「ああ？ 手前の尻拭いさせようってか」

「違うよ。ただ、カマラには真つ直ぐであつてほしいから……」

アーディルは自分の肩に手をあててごきりと骨を鳴らした。シーラーズの言わんとしている事がさっぱり分からない。

「何が言いたい、お前は話をはぐらかしていないか」

「……上手く言えないけど、多分カマラは足を止めないと思うんだ。本当に、何と言ったらいいのだろう………僕は、マイルナーには会いたいけれど、カマラと一緒にじゃなければ会えないような気がするん

だ
」

困惑交じりではあるが、アーデイルはひどく嫌そうな顔をしてみせた。それにも構わずシーラーズは自分の中の言葉を探しだそうとする。

「……………それに、カマラと居ると僕は力が出る」

「じゃあお前、カマラと一緒になればいいじゃねえか」

「……………それは、考えた事なかった」

心底、というほどではないが不意打ちを食らったような顔をしたシーラーズ、頭痛でもするみたいにアーデイルはそれを見るのを止めた。

「カマラは大事、マイムナーも大事、シーラーズ、お前はどっちを取るんだ？」

「そんな、比べられるようなものじゃないよ」

「だがお前のしようとしている事はそういう事だろうよ、マイムナーのためにカマラが体調を崩している」

「……………」

シーラーズは、痛みにこらえるような顔をして眉のしわを深めた。まるで傷をかばうように口を開く。

「……………カマラは大事だ。でも、友人として。だけど、それでも誰か

と比較できるようなものじゃないと思うんだ、人間ってというのは…」

「なんだか、お前と話していると疲れるぜ」

「……それは、何と言ったらいいのか」

シーラーズは苦笑した。

アーデイルはふいにカメラの頬に手を伸ばすと、自分の指紋でも刻み付けるみたいにゆっくりと触れた。

「今よりもっとふらふらしてっと、おれがもらうぞ」

アーデイルの言葉の意味が分からなくて、シーラーズはしばし動きを止めた。

「……え……?」

言い残し、相手の顔も見ずにアーデイルは部屋を後にした。

ぼんやりとした驚きの表情のまま、シーラーズはカメラに視線を落とす。

彼女の事は、そういうものではないのだ。友人で、幼なじみで、すごく大事な相手。

だけれども。アーデイルがカメラに触れた時に、手を叩き落したくなった。何故かは分からない。ただシーラーズは、早くカメラが立って動いて口を聞くのを見たいと思った。

どうしてか不安だったから、早く彼女の笑顔が見たかった。

*
*
*
*
*

19・小休止く表>

あたしは、熱射病と過労に倒れたらしい。

その時の事は病人だったので当然ほっとんど覚えていない。それでも、いくらか情報は入ってきていた。きちんと処理するには体力が足りなくて、幾分か後にそれを知る事になるけれど、とにかくあたしは竜巻到来の後ぶっ倒れて男たちに近く町まで運ばれたみたいだった。

何がなんだか分からない間にも、誰かが近くに居たっていう記憶はある。一人旅じゃないのだから当然シーラーズかアーデルだろうけれど、なんととはなしに安心してた、気がする。

そして、あたしはついに起き上がれるようになった。というより、意識を長い間たもっていられるようになった、というべきかな。

目覚めて体を起こそうとした瞬間に、シーラーズの声によってそれを阻まれる。

「カマラ！ まだ起きちゃだめだ」

「大丈夫……っと」

言いながら、半身を起こしたあたしの体は傾いだ。間抜けな話だ。でも、それを傍にいた人間が支えてくれた。

言わずもがなのシーラーズ。ああ、あたし、格好悪い。他人の世話になってばかり。

世間はお昼のようだった。開いた窓の向こうから日差しが注がれ、シーラーズの顔がくつきりとよく見える。

ずっと目をつむっていたものだから、目がくらみそうになるくら

い昼の光はまぶしかった。

「カマラ……」

まるで、あちらの方が病人みたいな重たい声音だ。目をしばたいて、シーラーズをよく見ようとす。そこには、非常に険しい顔をした青年が居た。説教をする前の大人みたいな、娘の帰りを心配して待つ母親みたいな、友人に裏切られたみたい、複雑な顔をしたシーラーズが。

「……えっと、あたし倒れたんだよね。介抱してくれてありがとう。ここはどここの町？」

ふいに、シーラーズの顔が捨てられた子犬みたいなものになった気がして、あたしは目を合わすことが出来なくなった。なんだろう、心臓がざわざわする。

「カマラ、君が倒れてからすぐに近くの町に走ったんだ」

声は小さく、言葉を聞かれないかのようなものだった。あたしは内容だけを取り上げて、頭の中でこれまでに起こったであろうことを推測し展開させる。

竜巻が来た。あたしは覚えている。でも、途中から覚えていないということはそのことで意識を失ったのだろう。それで、シーラーズとアーディルがあたしを休ませようと宿でもとってくれたのだろう、それがここだ。

あたしは今、広くはない部屋の中で寝台の中に納まっている。傍らにはシーラーズ。そういえば、アーディルの姿は見えない。どこかへ出かけているのかな。

それにしても、あたしたちの旅は急ぎであつたはず。どれくらい、

あたしはこの旅路の停滞を作り出してしまったんだろう。なんだか、申し訳なくなってくる。

「……カメラ、あの、」

「あたし、何日くらい寝ていたの？ それに、アーデイルは？ ていうか、ごめんねあたしのせいで、いろいろ足止めくらっちゃったでしょ」

さすがに、こんな状況になればあたしはシーラーズの思惑ぐらい、分かる。分かってしまう。シーラーズは何より他者を思いやる気持ちに長けている。ぶっ倒れた人間の心配をするだけでは飽き足らず、自分のせいだと自責の念にかられないはずがない。それを、口にさせたことなくあたしは言葉を重ねる。

きっと、次に言い出すのは「君はここに留まれ」とかいう内容のものだろうから。

そんなの、ごめんだ。あたしは自分の非力さくらい、よく分かっている。でも、倒れてから気づいた。

置いてけぼりにされるのは、ごめんだ。

竜巻を体験して思ったのは、竜巻などという自然災害を目の前にして人間は、男も女もないのだ。もしかしたら、飛んで行ってしまふことだって、あったのだ。たとえばそう、あたしじゃなくてシーラーズが。まあ、あるいはアーデイルとか。

旅が、一人であっても二人であっても、大勢であっても、危険じゃないとは言いきれない。厳しい砂漠の中を進むっていうのは、そういうこと。歴戦の勇者であっても、魔神でもないかぎり命の危険とは隣り合わせだ。それが、旅というもの。

だから、バグダッドで一人彼らの帰りを待つなんて、きつと今更たえきれない。

危険な旅に出た人を待つだけなんて、無理だ。

あたしは、謝った瞬間にシーラーズの顔が歪んだのも知らない。知っていたら、シーラーズはあたしに謝ってほしかったわけではないと、気づいただろうけれど、そんな話はあたしの知らない世界での出来事。

「でも、けっこうもう体も楽なんだ。休んだし、もうちょっとで再開できるかな。うん、大丈夫」

シーラーズの方は見ないで、腕をつけねから回すと、軽いというほどではなかったが、思った通りに動かせて、あたしは満足する。視線を下にしていたので、シーラーズの腕が目に入った。というより、握り拳が。手の甲に骨が白く浮き上がっている。すごく強くそれを握り締めているみたいだ。

怒って、いるのかな。

あたしのせいで、マймナーが前よりももっと遠くへ行ってしまうと、憤っているのかもしれない。さもありません、この旅はあたしに休み休み優雅な物見遊山をさせるためのものではなく、魔神である女性を少しでも早くこの人間の世界にいるうちに見つけ出す、ということが目的なのだから。

どうしよう、やっぱり、あたしは足手まといなんだ。

そんなバグダッドを出る前から気づいていたことだけれど、それでもあたしだって、マймナーを追いかけたという気持ちがあった。シーラーズを放っておけなかった。そんな場合ではないのに、“旅に出る”それだけのことに、魅力を感じてもいたんだ。

でも、体を鍛えているわけでもない、女の身であるあたしは、やっぱり体力もなく、腕力もなく、長い旅にはたえられるようには出ていないのだろう。そう、シーラーズは見なしているのだろう。もう諦めてほしいのだ。

「あのね、ごめんねシーラーズ。でも、あたし……」

せめて、もう少しだけ一緒にいさせて。
それだけが言えなくて、口をつむぐ。

「違う、カマラ。謝るのはこちらの方だ。ごめん、カマラ」

謝られるとは思っていなくて、あたしは思わず顔を上げた。シーラーズは、子供の頃みたいに、困惑した感情をあらわにしていた。ううん、それだけじゃない。まるで、泣き出しそうなくらいに見える。漆黒の瞳がゆらゆらと潤んで、悪ガキだった当時のあたしもすぐにひるんでしまった、そんな表情^{かお}。

そんな顔してほしかったんじゃない。それに、謝ってほしかったんじゃない。

ぐっと、シーラーズの顔が近くなったのが分かった。まるで、彼はそうすることで自分の思いが他人にも伝わるとでも思っているかのよう。

あまりにも真摯な瞳で、あたしはどきまぎするのも忘れてしまった。蛇に睨まれた蛙みたいに、あたしは身動きが出来ない。

「僕のせいで……ごめん」

違う。シーラーズのせいじゃない。あたしのせい。

でも、舌が凍りついたみたいに動かない。

そんなこと、言わないで。そう言いたいの。

「本当にごめん、カマラ。でも……僕は……」

シーラーズの黒い瞳がゆらいだのがよく分かった。こんなに近くに
いるのだから、分からないはずがない。決意をにぶらせているみ
たいに、彼は視線を落とした。それでも、意を決したようにまた持
ち上げる。

「カマラ。起きたのか」

第三者の声で、シーラーズはまるでつまみ食いがばれた子供みた
いに飛び跳ねた。すぐにあたしと距離を取ると、こちらに背を向け
て壁に視線をはりつけにしてしまう。

……な、なんだろう？

それはともかく、あたしはアーデイルの方へと視線を投げた。ア
ーデイルは相変わらず元気そう。シーラーズみたいに、無駄な自責
の念にかられたりはしていないようだ。平素と変わらぬ、少し人を
食ったように持ち上げられた肩。灰色の瞳はあたしに注がれていた。
彼にも迷惑をかけてしまったなあ。やっぱり、ちょっと後ろめたい
ような気がしてくる。

「……アーデイル、ごめんね、あたし」

「あー、うるさいうるさい。謝罪なんざごめんだ。いいからとつと
と体調調整えてる、ぼけ」

一言余計だったけれど、あたしはこういったアーデイルの対応の
方がうれしかった。自然、顔はほころんだ。アーデイルだってあた

しのことを面倒だと思っているはずなのに、まるで対等に扱われたみたいで、うれしかった。

でも、アーデイルは彼にしては珍しいことに何か言いにくそうに口ごもって、なにやら複雑そうな顔をした。喉に骨でもつつかえたみたいな、変な顔をしている。

「……具合は、どうなんだ？」

ふざけるでもない、からかうでもないアーデイルの様子はどこか真剣そうにも見えて、あたしは気まずくなってきた。だって、こんなアーデイルは珍しくあっても、居心地が悪いんだもの。

「あー……まあ、あと少しくらい休ませてもらえば、大丈夫、かな」

「嘘つけ。まだだるいくせに」

何故それを。確かに、あたしはまだ体中のしかかるような重みをぬぐえないでいた。それに、頭が完全に機能しているとは言いがたい。でも、もう本当に大分楽だ。目覚めたんだか夢の中にいるんだか分からない、うつつをさまよっていた頃とは違う。もう、意識ははっきりしている。

「うーん、じゃああと一日だけ休ませてもらえば……」

「カメラ」

その声は、あまりにもアーデイルには似合わない、重くて、生真面目で、言い聞かせるようなものだったから、あたしは身を引き締めてしまっていた。

「……なあ、お前、ここに残れよ」

「アーデイル、それは、」

「お前は黙っている、シーラーズ」

口を挟んだのはシーラーズで、アーデイルに反対するみたいなおぶりだったけれど、アーデイルに睨まれると険しい顔のまま黙り込んだ。

アーデイルは、彼もいささか険しい表情であるものの、自分一人答えを知る賢者のような、一つ高いところでものを見ているような顔をしていた。

「普通に考えてみる。お前は足手まといなんだよ、カマラ。マイムナーは、俺たちで見つけてやる。その方が効率的だ。今回みたいに倒れたお前の面倒をいちいち見ていては、進むもんも進まん」

「アーデイル、そんな言い方は……」

「本当の事だろうが。お前も、カマラが倒れるたびにそうやって心配して宿にかけこんでを繰り返すつもりか？」

それを言われると、シーラーズは弱いのだろう。また反論出来ずに眉を寄せる。

あたしはというと。

分かりきったことでも、いざ目の前につきつけられると辛いつてことを、よく理解した。

一人前と認められたような気がして、でもまだ子供扱いをされて

いたのだと分かったような気分だった。

正直いって、どう感じたらいいのか分からない。

悲しめばいいのだろうか。戸惑えばいいのだろうか。憤ればいいのだろうか。

ただ一つ、分かることは、まだ体調が万全でない今、少しでも口を開けば馬鹿なことを口にしてしまい、泣いてしまいそうということ。

「よく考える、カマラ。効率的じゃないだろう。相手は魔神だ。既に後手に回っているのも問題だし、こう遅れているものが更に遅くなれば可能性も低くなる。言いたかないが、迷惑なんだ、お前は

」

「アーデイル！」

自分でだって、そうだと思っていた。

だから、今更、言われなくたって、分かっていた。

わかっていたよ。

でも、今はもう何も考えたくない。ほうっておいてほしい。

もう嫌だ。アーデイルの顔も、シーラーズの顔も今は見たくない。

「一人にして」

それだけ言うのが精一杯。

あたしは、周りを顧みず、布団の中にもぐりこんだ。

ぐちゃぐちゃな心の中を見ないふりして、眠りにつこうと決めた。

優しい、夢の世界へ。

20・月夜に想うは

昔のことでも、覚えていないことでも、折に触れ、本人に会うとか他者から話を聞くとかすると、ふいに記憶がよみがえることがある。それは、話を聞いたからまるで体験したかのように錯覚するのと同じかもしれないけれど、それでもあたしは思い出していた。

幼い頃の話だ。

あたしは、自分が何らかの力を持っていて、他の子とは違う、強い女の子だと思っていた。何かきっかけがあったのだろうけど、とにかくあたしはなんとなく遊ぶ友達のリーダー格となっていたのだ。そこへ、同じようなリーダー格の男の子が一人、あらわれる。仲間を引き連れて。

あたしは当時、自分が女であることを意識していなかった気がするから、女の子も男の子も分け隔てなく遊び相手と見なしていた。でも、アーデイルは違った。彼は、男の子たちだけと遊んでいたよ。うだ。たまたまその時がそうだったのか、普段からそうなのかは覚えていない。それでも、あたしは顔を合わせた瞬間に、この男の子とは気が合わないと思ったのだろう。幾度か顔を合わせるうちにケンカする仲になっていた。

それが、アーデイルだ。

なんだ、昔からあたしはアーデイルとの仲がよかったわけではないんだ。

それなら、今のあたしとアーデイルが上手くいくはずがないんだ。納得。

なんて、納得するだけで終わったら、気は楽なんだけれど。

あたしは目を覚ました。

夜だ。暗くて、光なんてどこにもない。あたしはずっと眠っていたはずだから、部屋に明かりをともしようなんて考えはしてもらえなかったのだらう。そっと体を起こすと、前よりはいくらか体が軽い。

徐々に暗闇に慣れてくる瞳は、静かな夜をうつしだしていた。

一度眠りにつくと、それまでにあったことを忘れてしまえる。

それでも、よみがえってくるのは、アーデルの手厳しい進言。

あたしが、疲労により倒れたことで彼は迷惑をこうむったと言った。それは、本当のことで、あたし自身もそうだと感じていたことだった。

それでも、あんな風に、つきはなした物言いをされたいわけではなかった。

旅は辛くて、全然楽しいばかりじゃなくて、弱音もはいた。

でも、あたしは認めてもらえたみたいに感じていた。女の子なんて、キャラバンですら参加させてもらえない。よっぽどの理由がないかぎり、生まれた町や嫁ぎ先の家の中で暮らす。

それが、この世界での女の過ごし方。

それでも、あたしは、あたしだけは認めてもらえたんだって、錯覚した。

あんたは強い。そう、言外に伝えてもらえたような気がして。

でも違った。認めてもらえてなんかいなかった。お情けで旅の同行を許され、しかし限界を周囲に思い知らせてしまった。

あたしは、だめなんだ。

ここで、旅をやめるのがみんなのためなんだ。

“みんな”なんて、誰だかさっぱり分からないけれど、でももう、

あたしはこれ以上アーデルと接していたら、きっとバグダッドに帰ると言ってしまうのだろう。

せめてそうはならずに、この町にとどまるとも言わずに、ただ黙っていたい。

もうこれ以上、何か弱音をはくのはごめんだ。

どうしよう、泣きそうになってきた。

涙は嫌いだ。自分の弱さを認めてしまみたいで。

でも、夜のせいで寒いし。

まだ体調がよくなってはいないし。

もう、嫌なんだ。

一瞬父さんの顔を思い浮かべてしまい、あたしは馬鹿なことをしてしまったと知る。

涙はもう目尻にいつぱいになっていた。

「……カメラ……？ 起きて、いるの？」

思いもよらぬ声。

あたしは慌てて目元をこすった。誰、なんて言わなくても分かる。

でも、まさかこんな夜にシーラーズが婦女子の部屋にやってくるとは、礼節を重んじる彼からは想像できなかった。

部屋の入り口に、シーラーズは立っていた。手には明かりをともした燭台を持って。薄暗い部屋にほのかな明かりがもたらされ、あたしはオレンジの光をなんとなく安心出来るもののように感じて見つめていた。

「こんな時間に、ごめん。それに、女性の部屋にやってくるなんてものすごく不躰だって分かっている」

やっぱり、相も変わらずシーラーズは真面目一直線だった。

「……そんなの、いいよ」

今更だ。だってあたしは、男の格好をして旅に出ている。これはもう、あたし自身がまったく不躰で、はしたなくも有り得ない行動を取っていると言えるのだから。

そんなことより、どうしてそう言うわりにはシーラーズがあたしの部屋に来たのが、気になった。

きつと、あたしの気持ちをなだめつつも、この町にとどまるように言い聞かせるために来たのだろう。シーラーズは他人ひとの気持ちに敏感だから、アーデルの言葉にあたしがどう思ったのか、推測出来たのだろう。

「じゃあ、ちょっと、外に出ない？ さっき月がきれいだったんだ」

なんて言うから、あたしは少し怪訝に思いながらもシーラーズの言葉に従った。

満月には一歩足りない、端が薄くなつた丸い月の夜。

輪郭はおぼろげながら、くつきりとした影を作るほどの光を放つ月は、美しいものだった。夜の虚空にぽかんと一人でいる月は、さびしくないのだろうか。星も月の勢いにおされて、幾分輝きを失っている。

宿の外に出ると夜であるのに月明かりのお陰であたしはこの町の容貌をいくらか知ることが出来た。あたしのよく知るバグダッドのものよりは小さく威厳はないが、ミナレットが見える。それから、遠巻きにナツメヤシの木の影が。

夜だから、とても冷え込む。あたしに可能な限りの厚着をさせてまでシーラーズは、どうしてここに連れ出したのだろう。二人で立つて、宿の外壁に背を寄せる。

まだ何も、彼から答えをもらえてはいない。

「シーラーズ、あの」

「ごめんね」

ぼつり、こぼされたのはまたもや謝罪。そんなもの必要ないのにって分かってもらうにはどうしたらいいのだろうか？

「昼間、アーデルの言葉を、その……全て肯定するつもりはなかったのに、そうなってしまうた」

何を言いたいのかな、シーラーズは。あたしにはさっぱり分からない。だって、確かにシーラーズもそう思っているに違いないのだ

から。

あたしは、カマラは足手まといだって。

「本当は、自分が間違っていると思うんだ。だから、言えなかった」
さつきからずっと、あたしに顔を向けなかったシーラーズがこちらを向いた。

夜でも、暗くても、満月に近い月がはっきりと相手を見せる。

「僕は、カマラの望む通りにしてほしい。もしカマラが続けたいなら、この旅を続けてほしいと思っている」

すぐにはそれを理解できなくて、あたしの舌だけは戸惑った。

「え、な、何？ どういうこと？」

シーラーズはずっと真摯だった。真面目とか、そういう根本的な問題ではなく、あたしを、見つめていた。

あたしがしたいことを理解しようと、努めてくれている。

「……僕は、君の身が心配だよ、カマラ。でも、だからといって君の意思を尊重しないわけにはいかない。アーディルは、どうもカマラの健康が一番と考えているみたいだけれど……」

「そんなまさか。アーディルは、あたしが急ぐ旅の邪魔になるって、今回のことで分かったただけでしょう？」

お人好しにもほどがある。あたしはシーラーズの考えがいかに間違っているかを教えるべく、両手を広げた。

するとシーラーズは、困ったような、怒ったような、笑ったよう

な奇妙な顔になる。

「違うんだ、アーディルは、君の事が心配なんだ。だから、どうにかして君の体調が悪化しないようにとあんな事を言った」

「そ、んな……だって、あたし」

「僕も心配だよ。君は、バグダッドを出てから無理ばかりをしていく」

憂いに満ちたシーラーズの顔。相手に申し訳ないと思わせるようなもの。でも、今のあたしはそう思っている場合でもなく、鼓動の数を増やしている場合でもないのだ。

だって、シーラーズだったらまるで、あたしのことが大事でたまらないから、安全なところに居てほしい、と言わんばかりの口調なんだから！ そんなことは勘違いだと、あたしはあたし自身に言い聞かせなくてはならなかった。シーラーズの大事な人は、マイムナーだ。そりゃあ、たしかにシーラーズは友人も大切に思う気質だろうけれど。

「……それでも、ごめん。僕は、カマラと一緒に来てほしいと思っている」

口調に熱っぽさはなく、恋焦がれるでもない。そう、であったはずだ。

でも。

でも、シーラーズは、あたしと一緒に来てと言った。

心臓が、ものすごく稼動した。まるであたしのものではないみたいに。勢いよく動いているのに、それでも締め付けられるみたい

感覚。

これを、何と表現したらいいだろう？

一つ分かったのは、あんまり長い間シーラーズと一緒に居るのは、危険だっていうこと。

だって、もしかするとあたしは、消したい思いをよみがえらせてしまうから。

長く居すぎると、これが永遠に続くんじゃないかって思ってしまいそうだから。

ずっと、こうしてたいと思ってしまっから。

「上手く言えないんだけど、この旅はカマラがはじめてくれた。

だから……君がいないと意味がない。マイムナーも、カマラがいないと見つからない気がするし、それに……」

ふいに口をつぐんだシーラーズ。何かの間違いにでも気づいたみたい、黙りこくる。

あたしは、一人の女魔神の名前を聞いて、それをどう解釈するべきなのか悩んでしまった。だって、もしかすると、シーラーズはあたしを意思を尊重したいのじゃなくて、マイムナーのために一緒に来てほしい、そういうつもりだったら？ そうなの？ シーラーズ、あたしが必要なのじゃなくて、マイムナーのために、あたしが必要ななの？

だめだ。

あたし、また泣きそうになってくる。だって、そんなの耐え切れない。

もつごまかすのすら難しくなってきた気持ちに、太刀打ち出来ないほどの彼の思い。

どうしよう。どうしたらいいの。

「足手まといなんて思わない。辛いなら言って。カメラ、僕は……」
シーラーズの優しさが、辛かった。

この人は、時々ひどく残酷だ。

あたしはもう、シーラーズのこの時の目論見が分かってしまった。ただ、アーデルの邪魔が入らないところで、あたしに「まだ旅を続けてくれ」と言いたいただけだったということ。

本当にもう、どうしていいのかわからなかった。

これって、アーデルの時よりひどいって、思っべきなんだろう
か。

もうシーラーズの顔も正視出来ない。

きっと、アーデルも含め男たちは、あたしの体調を気遣ってくれているのは、間違いはないんだろう。でも、どちらもあたしの自尊心を傷つけずに彼らの望みをかなえるのには、失敗していた。

旅になんて、出なければよかった。

21・ダマスクス

^{バザール}市場には活気と品物が溢れ、肉屋、八百屋、粉屋、香辛料屋、パン屋などからふんだんに香りが飛び出していた。

ここは、ダマスクス。あたしたちの故郷の町、バグダッドからはかなり離れた場所にある、大きな街だ。有名なウマイヤド・モスクがあつて、長い城壁の中で人々が明朗に生活している。

あたしたち三人の旅人はというと、明るさともほがらかさとも少し遠ざかった場所で、異邦人を演じていた。

三人の会話が少ないのも、見知らぬ土地で浮き立つ顔が優れないのも、すべてきつとあたしのせい。

あの夜、シーラーズと一緒に旅を続けてほしいと言われた翌日、あたしはアーデイルに旅を止めるつもりはないと宣言した。いろいろ複雑ではあつたけれど、それがあたしの本心だったから。

何度か話し合いという名の口論を重ねたあと、アーデイルは折れた。というより、あたしが無理矢理について行ったという方が、正しいのかもしれない。

アーデイルは、今でもあたしを家に帰りたいだろうし、シーラーズは想い人がどこに居るのかも分からないのだ。あたしは、二人の人物になんともいえない、言葉にはし辛い感情を抱いている。そしてそれを隠している。

あたしたちの道行きは、順調ではあつたけれどいつしかぎくしゃくとした人間関係が形成されていた。

気まずいこと、この上なし。

それでも必要最低限の言葉だけで歩いて、目的地には着けるこ

とが判明した。あたしたち三人は、乗っていたラクダを預けると、街の探検に向かうことにした。気まずいままで。

香辛料のスパイシーな香りにまじって、エーシユパンの香りがする。あたしの好きなにおいだ。ついつい、惹かれてしまふ。

市場はどこも、いつも活気に満ちているものみたい。ダマスカスも日差しが眩しいけれど、あたしはこの頃やっと気分が少しずつほぐれていくのが分かった。これまで、ラクダで砂漠を移動する時には携帯できる簡素な食べ物しか口にしてこなかったから、焼いた鶏肉のにおいには、喉が鳴る。

緑色の野菜のスープを店先で食べている男性を見つめる。あれは、モロヘイヤスープかな。ふいにその男性と目があうと、にやつとされる。まるで、こんな美味しいものをただ見ているだけで食べられないのは残念だな、と言わんばかり。

あたしの腹部が空腹にうなる。うう、くそう、美味しそう。でも今は少しあったかい食べ物よりも、冷たいものが食べたい。水も、もうずっとぬるくなったものばかり口にしていた。

上手い具合に、通りがかりの人がどうも水売りのようなので、あたしは声をかける。水の冷たさを保つヤギの皮袋をたくさん吊り下げている男は、やはり水売りだった。あたしは財布から小銭を取り出して水を買うと、喉に一気にそれを流し込んだ。砂漠での移動では、言わずもがな水分というものが非常に貴重なものとなる。だから、たくさんは飲んでこなかった。それに、こんなにもひんやりとした美味しい水を飲めるなんて、すごく久しぶりだ。美味しくて、冷たくて、あたしはなんとなく安心してしまった。

そんな風にぼけつとつっ立っていたせいだろうか、あたしは人の波に押されて、ふらふらと足を動かすはめになる。

「おお、悪い」

と言われたり言われなかったりして、あたしは随分と自分の意思以外で場所移動をさせられてしまった。でも、視界に入った大衆食堂から素敵に良い匂いがして、あたしは気分を浮き立たせる。八チミツの香りとか、アーモンドの香りとか、疲れた体にはとても拒みきれない甘いものの匂いがした。もちろん食堂なので、タマネギをいためた香りとか、こうばしい羊肉料理の匂いもする。

「ねえ、あの店行こう」

振り返って、あたしは旅の仲間がそこには居ないことを知る。霧囲気はイマイチでもずっと近くにいると思ひ込んでいた、シーラーズとアーデルは、視界の中のどこにも存在しなかった。これだけの人が多い市場だから、はぐれてしまったんだ。

頭はすぐに探しに行くべきだと警告するのだけれど、足は動いてくれなかった。

あたしが体調を崩してから、ずっと気まづいままの旅の同行者。今は、すぐに顔を合わせる気分じゃなかった。むしろ、一人になったかった。

本当は、はじめて訪れた地で、男装しているとはいえ女が一人歩きまわるのはそう安全ではないと分かっていたけれど、それでも、体は動き出そうとはしなかった。

あたしは一人、食堂の中へと向かう。

22・大衆食堂

お昼過ぎだったので、まだ食堂の中は人気が多かった。まばらでも賑わう店内を、あたしは誰も座っていない机と椅子を見つけて飛びついた。

とにかく、お財布の許す範囲で食べられる限りのものを食べたい。とはいえ、あたしたちには分不相応なほどに潤沢な資金がある。追いかけているマイムナーさんのお陰である。

でも、全てなんて持ってこなかった。だって、逆にそんな大金を持ってしていると知られたら旅路では危ないから。三人で分けて旅費を持っている。それにどれだけ続くか分からない旅で、贅沢をしすぎにお金をなくしてしまっただけはいけない。

とにかくあたしは、何かあるのかを店員さんに聞いてみて、普段なら遠慮する量の多さの料理を頼んでみた。こっそり、机に置いたお財布と相談しながら。

しばらくしてやって来たのは、望んでいた通りのものだった。

瑞々しいつやと張りを持つイチジク、ナシ、スイカ、オレンジ。それから熟して甘みを増したであろうナツメヤシの実。こんがりと焼けた鶏肉、ハチミツをかけたミルク入りのご飯と、焼きたてのパン。

これで食欲がそそらないはずがない。思わず、おしとやかな女の子らしさも忘れあたしは右手を勢いよく持ち上げた。

「めぐみ深いアツラーの神の御名によりて！」

丁寧な食事の前の挨拶をすると（右手は持ち上げる必要はないけれど）、あたしは食べ始めた。

空腹というものは、何にも増して美味しいスパイスになるというが、それだけではなくこの食堂の料理はとても美味しいものだった。あまりに美味しいので、高級食材を使用する高級料理店なのではないかと、自分のお財布の中身が危うい可能性まで考えてしまったほど。

でも、出入りしているお客さんの身なりと粗末な店内の内装からしてそんなに金持ち向けのお店とは思えない。

最後に頼んだアーモンド菓子をつまみながら、あたしは満腹になったお腹で店内を見回した。談笑するお客さんに、水タバコを喫^のむ人もいる。

こういう大衆食堂では、水タバコが喫茶店みたいに回し喫みされる。ああ、いいなあ。そういえば水タバコ喫みたいなあ。

なんて思っているうちに、あたしはうとうととしてきた。だって、休みなしというわけではなかったけれど、砂漠から街へと来て腰をつけて落ち着いて休めるのは久しぶりだ。それに、こんなにお腹い

っぱいになったのも、本当に久しぶり。

お菓子を持つ手にも頼りがなくなってきた、あたしはまんじりとしはじめた。

何もかも全部忘れ、あたしはまるで自分の家にいるみたいな感覚に陥っていた。

いつの間にか息がつまるようになってきたメンバーとの移動。ゆっくりと休めるのはこれが最後かもしれない。相手のことを気づかずに、黙っているだけの道行き。それから解放されて、あたしはひどく安堵していたのかもしれない。

眠くて、眠くて。

考えたくなくて。

あたしはまどろみの中に入り込んでいた。

昼下がりの礼拝の呼びかけで、あたしははつと目を覚ます。アザーンはたまに目覚まし代わりになるけれど、この時もそうだった。日に五度ある礼拝は、無理でなければ礼拝堂まで行かなければならない。でも、時にはその場で済ませることもある。

あたしはダマスクスに不慣れでモスクがどこにあるのか分からないからとメツカの方を探して、その場礼拝を済ます。

ぼんやりした寝起きの頭で礼拝を終わらせると、あたしはふと手

にしていたアーモンドのお菓子に気がついた。まだ食べてなかった
つけ、とすぐに口にする。

それから、自分の頼んだ料理の行方も見渡す。すると食事の済んだ皿は全て片付けられ、アーモンド菓子の少し残った皿だけが机には上げられていた。

そろそろ、本格的にシーラーズたちを探さなくちゃいけない。夜になっても再会出来ないようだ、いろいろと困る。お菓子をすべたていらげると、あたしは立ち上がった。

お勘定を、と思い机をよくよく見ると、そこにはお菓子の皿しか存在しなかった。

ちよつと、待って。あたしは、所持金を把握したいあまりに、机にお財布を置いて、おかなかつた？

それが見つからないのだけれど、どういうこと？

背筋を嫌な汗がつつたう。

これって、まさか、まさかよね？

バグダッドの喫茶店で起こった事件よりも、もっと悪いことが起ころうとしている。

嘘でしょ。

「あの、このくらいのお財布知りませんか？」

気が動転したあまり、近くの人に片っ端から声をかける。

すると、その中の一人が声を上げる。

「見覚えはないんだが……坊主、もしかしたらさつき通りすがった男が……盗ったかもしんねえなあ」

そんなに近寄る必要もないのに、坊主の方に身を寄せてから出て

いったやつが居たぜ。

その言葉が、示すところは。

スリです、スリに遭ったんです。それはもう、鮮やかな手つきでした。え、別に、わたくしが寝ていたことは関係ないと思いますよ？

そんな言い訳、いくらお人好しシーラーズが相手でも、通用しない。

「ど、どっち行つたの、その人！」

「お、おお。わりとついさっきだったかなあ。右曲がったかな」

聞くが早いか、あたしは食堂を飛び出していた。背後から「食い逃げだ！」という店員の声が聞こえた気がしたけれど、今はそれどころではない。

食堂は、市場の大通りからはいくらか逸れた道にあつたけれど、そろそろ夕飯の食材を買いに来る客でにぎわう道は、人通りが少ないとはいえない。人混みにまぎれながらも、あたしは顔も知らぬお財布泥棒の姿を探す。

でも、一体どうやって泥棒を探そう？ 手がかりなんて、あたしのお財布を持っていること以外に存在しない。そもそも、盗んだ獲物を見せびらかして持ち歩いているはずもないのだから、あたしが持っている手がかりは皆無ということになる。

そして、最近気づいたのだけれど、あたしの後ろには、追っ手が存在するらしい。そう、彼の名前は食堂の店員、無銭飲食などを犯した罪人を引つ立てようと血気盛んに走っている。

あたしは、追っ手から逃げつつ、スリの泥棒を探し出さねばなら

ないのだ！

「ああもう、なんでこんなことにつ！」

走るしかないあたしは、広い通りに飛び出して、うっかりシーラーズかアーデイルと出会ったのなら、事態は最悪に転がるのか、良い方へ向かうのか、分からなかった。

ところが、シーラーズたちに出会うよりも確立の低そうな光景をあたしは見せられることになる。

よく見慣れた茶色地の布に赤い刺繍のある、あたしのお財布を手にする人間を見つけたのだ。あたしの財布を持って、シャーベットなんかを店で買おうとしている。

「そのの男ちよつと待てえええ！」

この人が多い中叫ばれて、すぐに自分のことだと理解する人間は少ないし、理由が思いつかなくともとりあえず振り返ってみようと思つものも、少ないわけではなかった。が、あたしの声に前科あるものは反応を見せた。

あたしの財布を持って、その中身を消費した男はあたしの顔を見るなり「やばい」とでも言いたげな顔をして、走り出した。

「待て、こら！ 財布返せ！」

相手が小心者でよかった、お陰であたしの財布を盗んだスリが彼だとすぐに分かった。追いかけるあたしを、まだ食堂の店員は追っているのだろうか。もう人が多い場所なので判断しにくいし、後ろを振り向いている暇はなかった。

敵は、どんどんと人気のない場所へと向かっている。それはそうだろう、あたしを撒きたいのだから。でも、そうはさせるか。あたしは、小柄なだけあって、すばしっこさには少しは自信がある。旅路の疲れはあるものの、まだ若いんだ！

スリは、狭い路地に入り込む。いくつも角を曲がるうちに、あたしは焦れてきた。このままだと、あちらの見知った道に入り、あたしは地の利がないために迷子になってしまうんじゃないかな？

迷いはあれど、相手の姿を見失ってしまっただけは問題だ。そうして、角をまた一つ曲がったところで、頭に強い衝撃を受けることになる。

何かなんだか、分からなかった。

でも、そのうちに自分は殴られたのだと知る。尻餅をついて、頭をくらくらさせているところに、男が数人、やってきたのだ。一人が、あたしの財布を盗んだスリで、他にも三人くらいあたしを見下ろしている。

仲間と呼ばれたか、仲間の元にあたしがおびき寄せられたのか。

「まったくお前もよ、こんなガキに後つけられるなんて馬鹿か？」

「でもこいつ、意外に金持ってたんだ。まだ持つてるかもしれないねえ」

あたしの財布を盗った男は、自分への飛び火を避けるかのように、あたしに話題を集中させようとする。立ち上がるうとしたあたしを、男たちのうちの一人が掴みかかる。あたしの首を掴み、体を持ち上げようとする。息が苦しくなったあたしは、自分の体が宙に浮きそうなくらいに持ち上げられているの知らない。

「そう身なりは良さそうに見えないけどな」

「あ……?」

あたしを掴む男が、怪訝そうに眉を寄せた。殴られた頭は痛いし、息がしづらい。何かこれ以上事態が悪化することはないと思っただけだけど、そうはいかないらしかった。

「こいつ、女?」

「は? まさか」

青ざめる暇もなく、あたしは服の襟元を引き裂かれていた。

「まじだ……、はっ、なんでこんな格好してんだ?」

男装をするにあたって、あたしは胸に布のサラシを巻いていたのだけれど、残念ながら服の上からはごまかせてもそれをなくしては、男だと主張するには難しかった。

にやにやと、下卑た笑いが男たちの顔に浮かぶ。

あたしは、忘れかけていた抵抗を思い出す。手足をばたつかせて、男の腕から逃れようとする。

「くく、よく見ると女の顔だな、悪くない」

爪を強く立てて、男の手から離れようとする。苛立った様子の方は、大した効果はなかったはずが、あたしから手を放すと突き飛ばした。

背中から壁に打ち付けられ、あたしは息が出来なくなる。

動けないあたしの元に、男たちが迫ってきていた。
いくらあたしでも、やつらが考えていそうなことぐらい分かる。
ろくでもない事態。心臓が、引っくり返ったような思いだった。

誰か ……！

幼なじみの顔も思い出せなくて、伸びてきた男の手にあたしは身をすくませた。

「止めておけ」

誰かの声がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3974o/>

アラビアン・デイドリーム

2011年9月18日13時59分発行